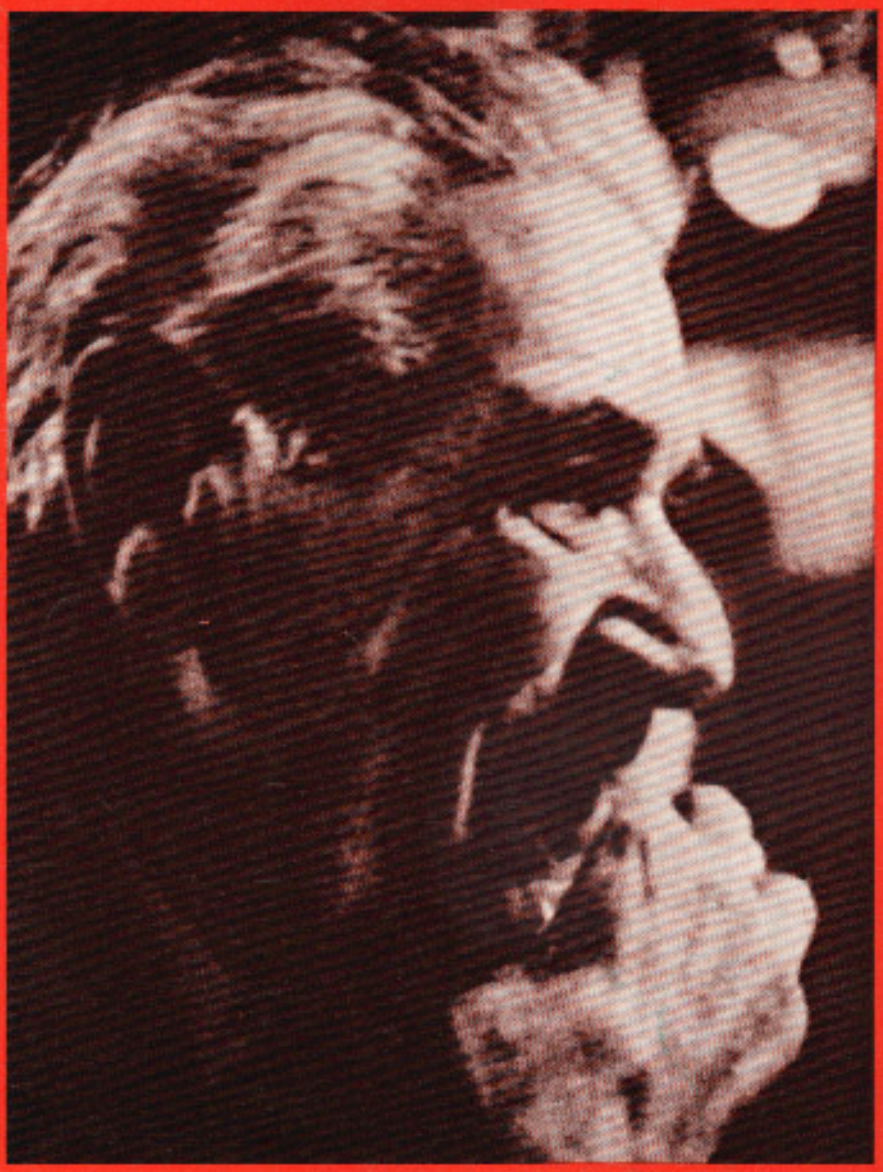
UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

No.61



GAPニューズレター　第61号目次

〈巻頭言〉共　鳴　1　ジョージ・アダムスキー

スペース・ブラザーズはなぜ来るのか②　2

アダムスキーのUFO写真は本物である　8　マイクル・G・マン

太陽が黄金色に見えた！　宮内温夫　14

宇宙冥想　久保田八郎　20

サイレンス・グループの正体　ジョージ・アダムスキー　26

フレッド・ステックリングからの手紙　29

会員の声　30

岐阜・大阪・新潟例会出張報告　36

日本GAP月例研究会案内　37

予告　昭和52年度日本GAP総会企画　38

フレッド・ステックリング氏招待募金計画　39

編集後記　41

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。

GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９６９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて〝コズミック・パワー〟の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

二挺のギターを準備し、両方の各絃を完全に調絃してから、一方のギターのどれかの絃を鳴らすと、他方の同じピッチの絃が共鳴して自動的に鳴り始める。特に第五絃（A音）の共鳴音が美しい。色にたとえればブルーであり、澄みきった青空を思わせるような爽快な感じがする。

これは物理現象であって、他の絃楽器でも試せるが、テスト用にはギターが最良である。共鳴の場合に唸り音を起こさせるには、片方の楽器のピッチを微調整して、わずかに狂わせておく。つまり振動の周波数をわずかに増減するのである。この狂いが大きくなるほど唸りの波長も短くなり、ついには全く共鳴しなくなる。

Aという人がBという人に魅力を感じて引き寄せられる場合も、本人の想念波動かまたは何かの特有な波動の周波数が一致して共鳴現象を起こすと考えられるが、これは昔から「類は類を呼ぶ」という諺で表現されている。付和雷同とは少々意味合いが異なり、もっと物理的な法則を意味するようだ。この法則は絶対なのであって、人間社会を観察すれば見事にこれに従っていることがわかる。JRC（少年赤十字）に入って、町の清掃や奉仕作業などを行う少年達は、万引団を組織して悪事を働く少年達と決して交わらないし、GAPの会員諸兄姉が暴力団と親密であるとも考えられない。周波数がまるで違うために、両者は絶対に共鳴しないのである。しかし性格その他でかなり相違する人が互いに親近感をもつ場合もあるが、これは過去世からのカルミックな原因があると思われる。夫婦、兄弟姉妹、恋人同志が特にそうで、逆行催眠でテストすると過去世で必ず何かの関連があったという〝記憶〟がよみがえる実例を米国の科学者が多数あげた英文の書物を昨秋マドリードの書店で偶然に見つけた（いずれ翻訳出版の予定）。

宇宙的見地からすれば万物一体であるから、周波数の相違などを意に介することなく、万人を愛し包容するのが宇宙の法則に適った生き方だ、と言えるが、百鬼夜行の現実の社会ではなかなか困難である。こちらが崇高な慈悲の心をもって相手の欠点に一切目をつぶることにしても、それを理解しない相手は「こいつはお人好しだ」ときめつけて、逆に利用してかかろうとし、悪事を働くかもしれない。そのような体験は編者にも多数ある。事業をやっていると寸刻の油断もできない。社長追い出しによる会社乗っ取り陰謀、公金横領等の事件が実にわが身辺にも発生し、次々と解雇処分にして現状を維持してきたと申せば、読者は驚かれるだろうが、社員のすべてがGAP会員でない事実を知れば、驚くに当たらない。

共鳴

要するに、宇宙の法則に従った生き方というのは、身辺に悪党がいてわがもの顔に跋扈する状態や無能力者による生産性低下等をなす術もなく黙視していることではない。毅然たる態度で社内を統制し、収益を上げて赤字を返上し、社員の生活を確保することが、資本主義社会の経営者の責務である。そのためにはときに叱咤督励する必要もあるし、厳重な訓戒を与える要もある。またときには社員を引き連れて料亭へ繰り込み、盛大な宴を張って英気を養わしむる必要もある。宇宙の法則という〝きれい事〟を唱えて、漠然と理想主義世界を夢想するロマンチストとなっているだけでは、真のコズミック・マンとは言えないだろう。

というわけで、何といっても現実を直視して、あらゆるトラブルに対して如何に対処するかをまず考えてかかる必要があることを痛感するのである。

ところで、悪質な人間や無能者が身辺に寄って来るのは、それを引き寄せる何かがあるからだろう。こちらの精神の状態が低次であったために、その類の者が共鳴したのか、あるいは善良であった者が出来心を起こしたのかもしれない。とすると、究極的にはやはり高次な精神波動を放射して、優れた人々を引き寄せねばならず、そのためには宇宙の法則に従った高度な生き方が要求されるから、結局、宇宙の法則はきれい事どころか、重要きわまりないものだということになる。むつかしい事だが、何といっても宇宙的哲学を基盤として、他人の乱れたマインドには同調せず、全身に遍満する宇宙の意識を認めて、それと共鳴するように努力しなくてはなるまい。

それについては「生命の科学」第四課に、「見られる個体があたかも自分であるかの如く、その物について意識的になる」とある。鏡の中に自分の姿が映った場合、実は鏡の中の人物も自分を見つめているのである、という哲学上の言葉があるが、これと同様に、外界の万物を見る場合、何を見ても、「見られている物はすなわち自分であり、その自分がこちらにいるもう一人の自分を向こうから見ている」というフィーリングを起こすことが、宇宙の法則の生かし方の根源なるものであり、これこそテレパシーその他の超能力開発の基礎的段階ではないかと思う。つまり、このフィーリングこそ自己向上と超能力への道を歩むキイなのだ。

無生物を見る場合もそうだが、特に生きた人間を見つめるときは、そのようなフィーリングを起こして相手を見ることが最重要であると思われる。先日も朝の電車内で壮年が二メートル離れた位置に横向きに立っているのを発見して「見られている彼はすなわち鏡に映った私である」という強烈なフィーリングを起こしながらテレパシーで呼びかけたところ、まもなく彼は感応してこちらを振り向いた。このときのフィーリングは具体的に言うと、彼の体内にすっぽりと私の全身が入り込んでダブったような感覚である。これは訓練次第でかなり高度に行えるようになる。海や樹木を見つめて一体化を図ってもよいし、動物、親しい人でもよい。とにかく練習を続けることだ。これを編者は宇宙冥想と呼んでいる。冥想といっても宗教的な行法ではない。他に呼称がないからそう呼ぶだけだ。

スペース・ブラザーズはなぜ来るのか(2)

意識と心の融合こそ永遠を生きる道！

●1965年4月10日、米ミシガン州デトロイトで行ったアダムスキー最後の講演のテープ録音の完訳。

ジョージ・アダムスキー

当局がなぜ一般人へ真相を伝えないかについては多くの理由があります。私は自宅に文書を保管していますが、それはウィンストン＝セイレム・トーチ・クラブで行われた講演録です。それによりますと、宇宙人が敵であるとしても、私たちはその人々に対抗する防御力を持たないので、むしろ私たちが敵意を持つようになるべきだと、露骨に述べてあります。しかし宇宙人はまだ敵意を示してはいません。これは空軍の報告なのです。その講演を行った人は、かつて空軍のトップであったスタンフォード将軍です。そのとき彼は二十五年前にオーソン・ウェルズが制作したドラマ「宇宙戦争」によって発生した悲劇について語りました。どの程度の被害があったかは話しませんでしたが、当時の模様を調べてみますと八万人の米市民が自殺を図っています。国中がほとんどパニック状態になったのです。こうした危険の存在するこの頃はだれもが互いに他人の喉元を狙っています。どこの国にしてもパニックを起こすことがよかろうはずはありません。

今、ある計画が企図されつつあり、私が望めば、その一部に参加できるはずです。米国を四～五ブロックに分けるというもので、これは宇宙と人間の期待するものとに関する漸新的な計画であり、過去十八年間のUFOに関する知識を自然に大衆に浸透させようというものです。これは私が現在やっているのと同じ方法です。私はカリフォルニア州に十一歳から十九歳までの青少年UFO研究者を五千人ほどかかえており、UFO問題の浸透計画を実施中で、バークレー市の若い一教授がそのリーダーになっています。私たちは航空宇宙局の宇宙問題に関する情報も浸透計画に取り入れており、生命の科学に関する哲学も応用しています。ただし心霊や宗教は排除しています。こうしたものは人間が利己的な目的を求めて、無知という径路を通じてひどくゆがめられているのです。だから私たちは〝宇宙的〟と言うのです。私たちの計画は商工会議所からも支持を受けており、学校のカリキュラムの中に組み入れられています。私のような老人は早晩この世を去らねばなりません。私たちが残す新しい生き方をすごすのは若い人たちであり、その新しい生き方は宇宙と関連があります。各地に支部があって、九百名の別なメンバーが活動しています。ある十三歳の少女が活動を始めて、三百五十名のメンバーを獲得しました。

混乱を起こすのは若者ではなく、老人

こうした計画は価値のあることで、未来のためになります。混乱を起こしているのは老人なのであって、このことは認めてよいでしょう。第二次大戦を起こしたのは若者ではありません。第三次大戦が発生するとしても、やはり若者が起こすのではないでしょう。他の民族とトラブルを起こすのは老人なのです。そして自分たちの無知のために戦場で若者を犠牲にします。無知こそトラブルの発生する原因です。一方、若い人々は眼覚めつつあり、今やまさにその時機が来ています。

宇宙人が支持していない事が一つあります。老人が自分の過失を補うのに、自分たちの血肉である若者を利用しているという実情です。私たちが若者を〝自分の物〟だと考えたならば、そんなことはしないでしょうし、神の創造物だと考えたら、やはりそんなことはしないでしょう。あらゆる人間は、自分がだれであろうが自分が何を考えていようが、それには関係なく、みな神性すなわち宇宙の原理をあらわしています。人間は宇宙の創造物であるからです。これは他の惑星も万物も同様です。私たちにはまだ学ぶべき事が沢山あるのです。

グレン中佐は実証した！

一九五五年に私は「宇宙船の内部」という本を書きました（注＝ユニバース出版社刊「宇宙からの訪問者」第二部）。これは現在品切れになっていますが、いずれ少し改訂して再版が出る予定です。この本の七十六頁に暗黒の宇宙空間における私の体験が述べてあります。私が目撃した光景を理解して頂くために、そのことをお話ししましょう。私はこの光景を〝花火現象〟と名づけました。この情報を求めるのに国民は一ペニーの税金を納める必要もありませんでした。あの本を買った人は三ドル五十セントを支払っただけです。しかし国民は私の宇宙旅行のために税金を出したわけではありませんし、スポンサーになった人もいるわけではありません。私は一人の宇宙の友に会い、相手が案内して宇宙船に乗せてくれて、多くの事を学ばせてくれました。

それから数年後にジョン・グレンが宇宙空間へ飛び出て、地球を回る軌道に乗りました。彼は何を報告したでしょう？一九五五年に私が〝花火現象〟と報告した光景と同じことを伝えたのです。しかし彼を人工衛星に乗せて打ち上げるには国民の五千万ドルの税金を必要としましたし、空軍がスポンサーになっています。ここである物をお見せしましょう。これはジョン・グレンが撮影した写真です。ごらん下さい。「NASA（米航空宇宙局）六―S六二―四八」となっています。「宇宙飛行士ジョン・グレンがMA六人工衛星から撮影した宇宙」と書かれています。この写真には多くのスジが写っていますが、それらは非常にきれいな小さな円形の物体です。これがスジになっているのは物体群が急速に移動したからです。これは大変な光景です。この線は物体の航跡で、ここには点となって写っているのもあります。ここにはいわゆる母船も見られますし、その下方には別な母船もいます。

宇宙空間には何もないと考えられてきましたが、そうだとすれば、宇宙の完全な暗黒の写真中に写っているのは何でしょう？　当局はこれを宇宙船とは言いませんが、ちゃんと写真に写っているのです。グレン中佐が撮影したのです。これこそ彼が〝花火のようなもの〟と称した物で、他の物体も写っています。

奇妙に思われるかもしれませんが、私は宇宙空間の沢山の写真を撮った唯一の

人間です。これは自慢話ではありません。私は自慢をすることはきらいです。二度の機会に月面の写真を撮りましたが、それは全然公開していません。またその実写映画フィルムを持つ唯一の人間でもあります。それで他のコンタクティーたちはどうなっているのか、こちらが知りたいくらいです。彼らが適切な分野で活動していないということは、米国民が何か誤った事をやっているのでしょうか？彼らが考慮されていないというのは、何か間違った事があるからにちがいありません。私はたびたびワシントン市へ呼ばれますが、彼らの意見は重視されず、完全に無視されています。数年前、私はアイオワ州で講演をしましたが、個人的に新聞に情報を提供することもできませんでした。「読者はそんなバカげた話題を望まないのだ」と新聞社は言っていました。彼らは他のコンタクティーと同じ線にそって私が講演をやってきたと思ったのです。こうしたことに対して一体どんな厄介事が起こっているのだろうと私は思っていました。人々はいつもなら喜んでいたのですから――。どこでも人々は親切にしてくれて、私を援助してくれたものです。

こうしたことはすべて、すぐれた情報径路を破壊してきた狂信者によって、だめにされています。

それで、とにかく私はその夜、講演を行いました。そしてはっきりわかったのは、会場へ一人の記者が来ることになっているということでした。講演会場は満員でした。私は今お話ししているような講演をしたのですが、翌日になって、間違っている原因を発見したのです。

私は次のように話しました。「地球へ来るスペース・ピープルは、幽霊や霊魂ではない。彼らはあなたがたや私と同じ人間なのだ。だれもその一人になれるのだ」と。私たちも〝スペース・ピープル〟なのであり、宇宙空間を動いているのです。あなたがたが何を信じようと私は気にしません。あなたがたが何を信仰しようと、それは私に関係のないことです。しかし真理はあくまでも真理です。

ところで、私はブラックホック・ホテルに滞在していましたが、朝食後、ラウンジに座って周囲を見回しました。その日のスケジュールでは何も予定してなかったため、別段することはありませんでした。すると一人の男が新聞を手にして近寄って来ました。彼は新聞と私とを交互に見ています。そして声をかけました。「失礼ですが、これは、あなたではありませんか」

新聞に私の事が出ているとは知らなかったのです。見ると、私の顔写真と講演で話した言葉「彼らは幽霊や霊魂ではない」が掲載されています。私はそこから出て行くまでに長時間を要しました。なぜなら……（訳注＝ここでテープのA面が切れている）。

二日目の質疑応答

（B面……ここから質疑応答に入っている）……さかさまになったり、正常になったりすると言えばよいでしょう。底におもりをつけた小さな人形を投げるならば（訳注＝起き上がり小法師）、直立します。人間もそのように動きます。別な惑星から来る宇宙船もそのように作動するのです。そんなふうに建造されているのです。自然の万物は概してそんなふうに動きます。

質問　昨夜映写された映画で見ましたように、円盤が縦に飛ぶ場合、何かの瞬間に安全ベルトで体を縛るのですか、または回転し続けるキャビンを持っているとすれば、どうなるのですか。

答　大丈夫です。円盤にはあらゆる状態を制御するいろいろな条件がそなえてあります。いわゆる気密条件などです。ただし地球の人工衛星の気密法とは違います。

質問　あなたが乗った母船や円盤などの人工的な重力、気圧、温度などは、地球上のそれらと全く同じなのですか。

答　そうです！

質問　驚くべきことではありませんか。

答　そう、どの宇宙船にも惑星にも多少の気圧の変化はあります。一平方インチにつき十五ポンドから十ポンド程度の差はありますが人間に影響はありません。それ以下になると影響が出始めます。したがって地球と他の惑星間との差は五パーセントぐらいで、十五ないし最低で十ポンド程度です。私たちが円盤内の気密室に入ると、それに肺が慣れるのです。ちょうど潜水夫が海中から水面上に出て来るときと同様です。もし急速に水面に出ますとケイソン病になりますが、ゆっくりとなら大丈夫です。これと同じですね。

質問　見たところ月の大気圧はかなり低いようですが、これについて彼らは何と言っていますか？

答　六パーセントだと言っています。したがって月面上で快適な状態になるには人間の肺活量を九度減少させねばなりません。それには二十四時間ないし十二時間を要しますが、その時間は各人によります。人間の肺や肺小葉はエアポケットであり、気象条件等にみずからを調整しなければなりません。海抜ゼロの位置とメキシコ市との間には三パーセントの差がありますが、低地と同様に快適にすごせます。

質問　火星には酸素が少ないといわれていますが、これは本当ですか？

答　酸素が少ないという可能性はあるでしょうが、事実だとは思いません。私たちは現在地球以外の事に関して事実はわからないのです。地球の内部に関しても事実はわからないのですからね。たとえば米国が最初に打ち上げた人工衛星は、大気圏外の諸条件を測定することが目的で、それから地球へ返されました。ところがこの装置は実際には「地球の表面に酸素は存在しない」と記録しました。酸素がないといっても、私たちはそれが存在することを知っています。

あなたがたは電波が存在することを知っています。ラジオやテレビを通じて話しかける人は死者ではなく生きた人間ですが、しかし本人を見ることはできませんし、相手の存在を感じることもできません。それにもかかわらず出演者は各自

の家の中に出現します。それにはラジオを買って、ダイアルを回せばよいのです。チャンネルを選べば、出演者はテレビの画面に現れます。しかも家庭の部屋と放送局とは三千マイルも離れているかもしれません。

よろしい、テレビ画面に現れる人間を例にあげましょう。今日、私たちが持っているテレビのスクリーンには五百本の走査線があると思います。何かの像を再現するために、五百本の異なる線が用いられるわけです。ちょうど生まれ変わりと同じです。フランスでは千五百本の走査線が用いられるということで、これなら、もっとすぐれた像が再現するでしょう。しかしどんな像が再現されようと、すべてただ一つのパワー、ただ一種類の電波で送られるだけです。これは五百本の微小な針金をよじって一本の太い鋼索を作るようなものです。

そこで、創造主の意識（コンシャスネス）――これなくしては万物の創造は行われないのですが――が、ふたたび出てきます。現在、世界には三十億の人間がいます。ちょっと考えてみて下さい。三十億の人間がいて、各個人用に五百本の線があるとして、それで万人を作り上げるとすれば、五百本かける三十億となり、ぼう大な走査線になりますが、それが一本の太い鋼索となって現れます。そしてその鋼索は全英知、全意識の一片にすぎません。意識には限度がないからで、しかも鋼索は限度のあるものです。この鋼索がどんなに太く長くなっても、全宇宙空間を満たすことはないでしょう。そこで全宇宙は意識の大海であり、その中で万物が生き、死に、再生するのであると言えます。この意識には限度がありません。

イエスは言っています。「人間や主人を敬（うやま）うな」と。宇宙にはただ一つのものしか存在しないからです。それは人間の〝父〟です。イエスはそのことを直接に人間に語ったのであって、彼自身を通じて語ったのではありません。聖ステパノがイエスの復活の後に尋ねました。

「先生は〝父〟について語りながら、その〝父〟を私たちに見せてくれませんでしたね」

イエスは答えました。

「きみは〝父〟をまだ見たことがないというのかね？」

ここが地球の一般人とスペース・ピープルの違うところなのです。イエスは言っています。

「きみはずっと私と一緒にいながら〝父〟を見たことがないというんだね？」

ここで創世記をのぞいてみましょう。このように書いてあります。万人は創造主に似せて創られたのであると。救世主イエスに似せて創られたのではないのです。したがって私が一人間を見るとき〝父〟の現れを見ていることになります。スペース・ピープルもあらゆる人間や万物を同じように創造主の現れと見ています。創造主が現れていなかったら、万物は現状のままにはあり得ないでしょう。それで私たちがその段階に到達するならば、最初にもくろまれたような生き方をし始めることになります。

これが、スペース・ピープルがはるかに進歩している理由です。彼らは聖人でもなければ悪魔でもなく、ただはるかに進歩しているだけです。彼らはこうした基本的な理解をもち、互いに精一杯にそのような生き方をしているからで、そこに私たちとの差があるのです。

泥球（どろだま）のたとえ

少し別な工合にこの問題を説明してみましょう。湖水、クリーク、海水のいずれにせよ、水滴はあくまでも水滴です。同じ元素からできた水です。さて、一滴の水をここへ落とすことにしましょう。それは落ちるとすぐに形態（すがた）物になります。その水滴は平たい表面に落ちたので、底の平たいドーム状の形となります。そこで水滴は言います。「ぼくを見てくれ。ぼくは個別化した実体になった」と。しかし落ちた他の水滴は少し違います。どれも底は平たいのですが、形は大小さまざまです。したがって各水滴はそれ自体、個性化されています。私たちが経験によってわかっているのは、この水滴はもっと大きな水のボディーに属しているということで、世界中の水に属しているということです。それがボディーを離れることによって自身を個別化させ、一個の実体になったのです。この水滴はころがるにつれて正体を失います。それは泥のかたまりになるからです。どこをころがろうとも、何を吸収しようとも、一向に気にしません。そしてついに泥の球になります。状況は変わりました。今や一個のフォームになったわけです。それ以前はフォームではなく、液体ガスでした。今はフォームですから液体ガスは消滅しました。しかしその元の支持者すなわち創造者は水だったのですが、今や泥球は言います。

「ちがうよ。そうじゃない。ぼくを見てくれ。ぼくは泥の球体なんだ。表面には水なんかありゃしないよ」。こうして水よりも泥球として認めてくれと主張し続けます。しかし水こそそのフォームの真の基礎です。だが泥球はなおも主張し続けて、水分が眼に見えないために、こちらが伝えようとすることを認めません。自分に見える自分の姿は泥球だけです。

しかし泥球になった水滴はついに止まって言います。

「ぼくはここで止まることにしよう。もうころがるのはやめよう。他の泥球たちはもうころがるのをやめて、古き良き時代に返ろうとしているらしい。ぼくもそうしよう」

泥球たちは停止し、時間はすぎて、水分は蒸発し、〝チリから作られて、ふたたびチリに返ってゆく〟のです。私たちはこれを〝死〟と呼びます。一方、チリとしての無機物はチリに返り、まもなく他の泥球になるでしょう。大小さまざまの個体にまた応用されるでしょう。最初の泥球の正体はなくなりました。永遠に！　それは短期間、自己本位に生きただけです。意味がわかりますか。

進化する泥球（どろだま）

しかしもう少し利口で知識欲のある泥

球があるとします。あらゆる物を分析して、その奥までも探ろうとします。そこでこの泥球は更にころがり続け、探求を続けます。それは単なるフォームではありません。その内部に何かがひそんでいて、他の泥球とは違うのだと語りかけます。私たちが個体と呼ぶこの泥球を、何かが作り上げているのです。そこで泥球はますます探求を続け、ころがり続け、ひどい場所に打ち当たり、地獄のような時をすごし、どこかへ到達しようとします。そして、ときには疑問を起こします。自分はいつかそこへ行けるのだろうかと。いつかは行けるだろう。

ついに泥球は広大な水面の岸辺に来ました。ここは海なのかもしれない。泥球は途中であらゆる恐ろしい物事を体験しました。さまざまの泥れた物に接触しました。純粋な物は何もありません。あらゆる種類の汚濁した土くれがくっつきました。

しかし泥球がこの大海原の岸辺に着いたとき、燦然と打ち寄せる最初の波が、彼を水面の中に運び込みました。そのとき、このフォームを形づくっていた水滴は急に分離して、海洋の一部分になりました。そしてフォームを形成していた泥や砂も広大な海中に吸収されました。その瞬間、それは純粋になったのです。あらゆる泥や砂は消滅しました。泥球は今やそこで〝万物〟と一体化したのです。かつて泥球のすべてを成していた水分や要素は、海洋の一部となりました。これは海洋との一体化であり、彼はその一部と化したのです。その海洋がいかに広大であろうとも、その中のどの部分といえども、全体は彼の体そのものです。泥球が海洋の体と同じになったからです。しかし、泥球はなおも彼自身が水滴であったときの自身の正体を忘れていません。なぜなら泥球は自分に関することすべてを万物の一体性の中に持ち込んだからです。そして泥球は体験や記憶が永遠となっている場所へ自分を置いたのです（訳注＝この泥球をアダムスキーは自分にたとえてIと表現している）。

心が忘れた体験を意識が思い出させる

七歳の子供でさえも七十歳になったときになおも物事を記憶できるように訓練できるのですが、七歳をすぎるともう子供は記憶を次第に失い始めます。子供に対しては、まず記憶を失わないように育てる必要があるのです。人間というものは、今何かを聞いて一時間後にはそれを忘れています。これでわかるのは、心は記憶を保たないということです。これは人間が七歳の当時以上に現在は心で物事を処理しているからです。しかし意識は記憶を保っています。したがって泥球を形成した水滴や海洋は〝全意識的〟であり、いわゆる〝創造主〟または〝宇宙〟なのです。そして水滴が経験として経たものやその記憶の一部として残したものは、今や時間と永遠という記録所の中に保管されています。本人はいつも自分自身の正体を認めることができるのです。これは一本の指が自身の正体を認めるのと同様で、手の一部分ですが、もう手と一体化していて、分離して生きることはできません。創造主でさえも二種類の法則を働かせているので、常に学んでいるのです。今かりに人間が創造主に似せて作られたのではなく、創造主を人間に似せて作った個別的なものだとします。いいですか。この個別的な創造主がどこかの王座についているとして、彼が二種類の法則を作って、それを働かせているとします。この二つの法則とは〝男性と女性〟原理であり、陰と陽です。この二者が結合するごとに一つの現象を生み出し、各現象はみな相違します。常に少しずつ違うのです。これは万華鏡みたいなもので、二種類の材料をその中に入れて、好みの速さで回せば、千変万化の模様を見ることができます。二つと同じ模様はありません。そこで創造主は王座について、その変化する模様を見ているとします。彼は二種類の俳優を用いて人生劇を演じさせ、瞬間的にさまざまの変化を生じさせます。彼の心は各模様のどれにも特別に好みをもちません。一瞬はある模様で、別な瞬間は別な模様となり、絶えず異なります。そして模様が異なるたびに彼は学びます。

これと同様に私たちも学ぶことをやめません。もし人間が一肉体内に自己の実体（意識）があるとまず考えて、それを写真に次々と撮影するとすれば、ある瞬間には写しそこねたり、ある瞬間には写ったりします。言い替えれば、わずかなギャップが生じるわけです。そうすると七十歳までに本人は無数の死と生まれ変わりを経たと考えてよいでしょう。なぜなら、撮影済の写真はすでに過去のものであって、決して返ってはきませんし、これから撮影しようとする瞬間は現在のものであり、それもやがて過ぎ行こうとするからです。私たちが現在すごしている生活の段階に到達するまでには、やはり無数の死を経ています。死とはすでに役立ってしまった、決して返ってこないもので、生とはそれにかわってこれから役立とうとするものです。したがって生命は死ぬものではありません。人間がそれを正しく理解するならば、生命は死ぬことはあり得ないのです。

しかし生命は未来の経験を迎えます。経験というものに終わりはありません。もし何もすることがなければ生命存在の意味はなくなります。生命が生命であるためには活動的でなければなりません。だから旧約にも〝神〟をあらわす創造主のことがあとで述べるように書いてあります。しかしなぜ一般人は神がアゴヒゲを生やし、白髪の老人であるかのように描きたがるのか、私にはわかりません。創造主とは実際には基本的な状態の生命として表現されるはずです。それは赤ん坊でもなければ老人でもなく、基本的な状態です。旧約のある個所に創造主が次のように表現されています。

「神は今日であり明日であり、永遠である。変化のない、同じものである」

これが真の生命であって、決して変化するものではありませんが、しかし生命それ自体はさまざまの結果を生じさせます。あなたがたは、生活を楽しむために生命があるのだ、さもなければその存在

の意義がないと言うかもしれません（こ．こでアダムスキーは笑う）。しかし、それこそ人間が迷ってしまった姿です。私たちは〝眼に見える物〟を通じて働いている〝眼に見えない物〟なのであり、泥の球なのです。なかには途中で嫌になって立ち止まる泥球もあるでしょうし、なかには探求を続けて、ついに全包容的な意識という海の岸辺に着いて、それと一体化するのもあるでしょう。「これはまばたきするほどの短時間で達成できる」とイエスは言っています。説教師や教師や他人がそこへ連れて行ってくれるのではありません。自分でその道を旅しなければならないのです。教師はその道がどこにあるかを教えることはできます。これが奇妙な問題となるところです。

●1963年5月，コペンハーゲン空港に到着したアダムスキー

教師というものは他人に何かを教えるのではなく、他人がすでに知っていながらも忘れてしまった事を思い出させるものだというのですが、しかし自分が理解してもおらず、体験もしなかったのに、どうやって教師の言う事を理解できるのかという問題です。新しい物事を学ぶには時間を要します。しかし何かが伝えられると本人はそれを把握して理解します。そこで教師が行うことは、本人がすでに知っているか体験している事を本人に思い出させるということなのです。私たちは言います。

「自分が五歳であったとき、ああいう事をやったことがある」

しかし私はそんなことをすべて忘れているでしょう。だれかがやって来て言います。

「ジョージ、おまえが五歳のときに、これをやった、あれをやった、ということを覚えているかい？」

「冗談じゃない。私はみんな忘れていますよ」

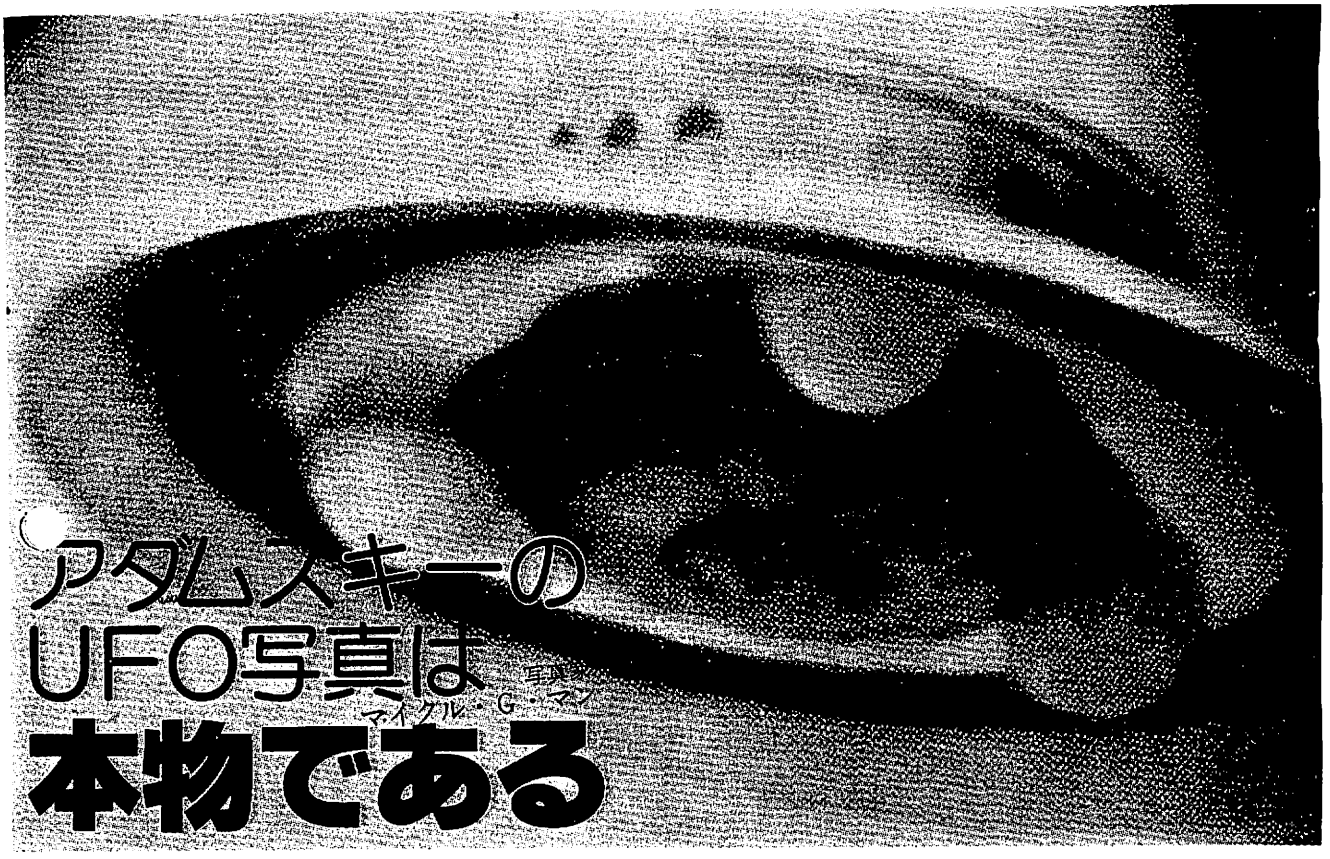
そこで相手は私に思い出させます。私がそれを思い出せるのは、自分で体験をしているからなのです。体験をしていなければ、相手が話してくれても思い出せないでしょう。教師の役割は、ただ本人に知覚を起こさせるということにほかなりません。

これと同様に、人間の心（マインド）が忘れている事柄を意識（コンシャスネス）が思い出させようとしているのです。子供に美しいオモチャを買ってやりますと、子供はそのオモチャを誤って用いるかもしれません。私たちは肉を食べるときに、それを歯と指で引き裂くかわりにナイフを用いて面倒をなくします。しかしそのナイフで他人を斬れとは教えられていないのに、斬りつけたりします。したがって、それは人間を楽にする目的で創造された物の誤用ということになり、そこに悪魔が入り込むことになります。しかし元の創造物は、それを創造した〝至高なる英知（創造主）〟と同様に聖なるものです。したがって、これ以上改良すべき物は何も存在しません。ナイフはすでに完全に作られています。それを認識して正しい目的に使用すればよいのです。

昨夜お話ししましたように、私たちは現在住んでいる世界こそ聖なる世界なのであって、この世界は創造主によって作られたのです。その創造主は神にほかならず、しかも私たちは自分の実体の真の源泉から自分を切り離すことによって自分を軽視し、小さくしています。真の源泉というのは自分の意識（コンシャスネス）です。私たちは心や知性の面では巨人になっていますが、意識（コンシャスネス）の面からみると、〝道徳低能〟になりさがっています。本来の人間になろうと思えば、その意識（コンシャスネス）の面を表面に出さねばなりません。私たちは一極端から他の極端へ移動してはなりません。イエスは言っています。

「人間は物を使用することを禁じられているのではなく、それを適度に用いればよいのだ」。言い替えれば、バランスをもたせるのです。人間は巨大な心（マインド）を持つ極端な発達をとげましたが、道徳面では何もやっていません。今、人間がやらねばならぬのは、この心（マインド）という巨人を五十パーセントほど小さくして、私たちが見失っているこの巨人の創造主を表面に出すことにあります。心（マインド）と意識（コンシャスネス）を各五十パーセントずつにして混ぜ合わせるならば、私たちは本来の人間になり、世界は一体化するでしょう。私たちが人間のあいだに設けたあらゆる分裂を排除すればよいのです。私たちの意識（コンシャスネス）は永遠なる部分であり、心（マインド）は別なものなのです。

久保田八郎訳



アダムスキーのUFO写真は本物である

写真ライター
マイクル・G・マン

「ああ、あいつはイカサマ師だ。あいつの話ぶりからわかるよ」

「初めからあいつがでっちあげていたんだ」

ジョージ・アダムスキーの死後、こうした言葉が広がってきた。もとはアダムスキーを支持していたオランダの〝UFOコンタクトグループ〟のレイ・ダクィラは、今次のように言っている。

「私はもうアダムスキー氏の話を百パーセント支持しません。真実が終わってフィクションが始まっているのか、何とも言えません」

（訳注＝レイはかつてオランダGAPリーダーとして活躍した女流UFO研究家で、編者もかなり文通したが、その後完全に離れてしまった）。

アダムスキー信奉者の多くは、彼の教えを捨ててしまった。

私を知っている人々は、UFO問題に関する私の主な関心はUFO写真にあることをご存知である。たしかにアダムスキーは最大かつ最も興味深いUFO写真類を撮影したのだ。彼はUFOを操縦する宇宙人との会見中に、個人的にこれらの写真を撮影したと称している。

私には判断をくだす資格はないし、彼のコンタクトの説明や著書類の内容を判断することにも関心はない。ただ科学的に彼の写真類を分析する立場にあるだけである。

多くの人がその写真類を見て、ブリキカン、模型、玩具等による巧みなトリック写真だとみなしている。「ヤンキー」誌がコーヒーカン、ハブキャップ、それに三個のピンポン玉を用いて、球型のすばらしい円盤模型を作り、それを撮影して、写真入りのコンタクト・ストーリーをでっち上げた。これを読んだ一般読者がこのインチキ記事を信じたという事実は、アダムスキーの話も同様にインチキだということを読者の心の中に立証させたことになったという。この推論が合理的なものだとすれば、私がTWAの七〇七ファンジェット機の模型を作って、それを撮影したとすれば、このタイプのジェット機はすべて存在しなくなる、ということになる。だがTWAはそんな状態になることを心配してはいないだろう。

ベーカー軍曹も円盤を撮影した

さてアダムスキー問題の諸事実を調べてみよう。彼は吊り鐘型と葉巻型の一連の写真を撮影した。これと非常によく似た物体を撮影したのは、セドリック・アリンガム、ハワード・メンジール、ジョージ・ストック、ダニエル・フライ、ロバート・コウ・ガードナー、ジョージ・バン・タッセル、ポール・トレント、その他多数の人々である。したがって、この種のUFOを見たのはアダムスキーだけではない。ここで特に私はアダムスキー問題を傍証すると思われる三種の実例をあげたいと思う。

まず第一に、ジェロルド・E・ベーカー軍曹が撮影した、かなりボケた円盤写真を引用しよう。その写真は円盤の底部とおぼしき部分を示しているが、これはアダムスキー型円盤に驚くほどよく似て

いる。そのボケた輪郭は大体にわかるし、実際、物体が急速に移動するのをブローニー判ボックスカメラで撮影したという事実のために、目撃そのものを立証するのに役立っている。

（訳注＝ブローニー判とは6×9センチ判。むかしはフィルムの感光度が低く、レンズの解像力もよくなかったために、この種の中判カメラが普及した。現在はフィルム、レンズ共に良質化したので35ミリの全盛時代となり、国産ブローニー判カメラとしては、プロ用としてホースマン、マミヤプレス、フジカGL69の三機種が出ているにすぎない。現在はブローニーフィルムも高感度となったので、もしベーカー軍曹が右の三機のどれかを使用して高速シャッターで撮影したら、すばらしく鮮明な写真が撮れたことだろう）

ベーカー軍曹のボックスカメラ（箱型カメラ）は、二十五分の一秒のシャッタースピードをそなえていた。したがって動く物体ならボケルだろう。

（訳注＝一体にアメリカ人は写真術にあまり関心を示さない。世界最高の高級カメラを駆使してフィルムを湯水のごとく使用し、〝芸術写真〟をジャカスカ撮りまくる日本人を彼らは驚異の目で見る）

興味深いのはこれはアダムスキーがパロマー・ガーデンズで至近距離で金星型円盤を撮影した三分後の一九五二年十二月十三日午前九時三十分頃であったということだ。

（訳注＝アダムスキーめがけて金星文字のネガホルダーを落とした円盤が、その直後にベーカ軍曹の方へ超低空で飛んで行ったのである）。

傍証となったコニストン円盤

次に写真による傍証として、宇宙飛行士スコット・カーペンターが撮ったUFO写真がある。この奇妙な物体はジェミニ宇宙船の近くで目撃された。驚くほど吊り鐘型に見える。

三番目の写真は、英国コニストンの医師ダービシャー博士の息子である、当時十三歳のスティーヴン・ダービシャーが撮影したものである。それは一九五四年二月のある朝のことだった。ランカシャー、コニストンの幼いスティーヴンは、どう仕様もない衝動にかられて自宅の裏山の丘へ登りたくなった。そこで従弟のエイドリアン・マイアーを連れて、小鳥の写真を撮るつもりで丘へ登った。小鳥の観察が彼の主な趣味だったのである。

突然エイドリアンが叫んだ。

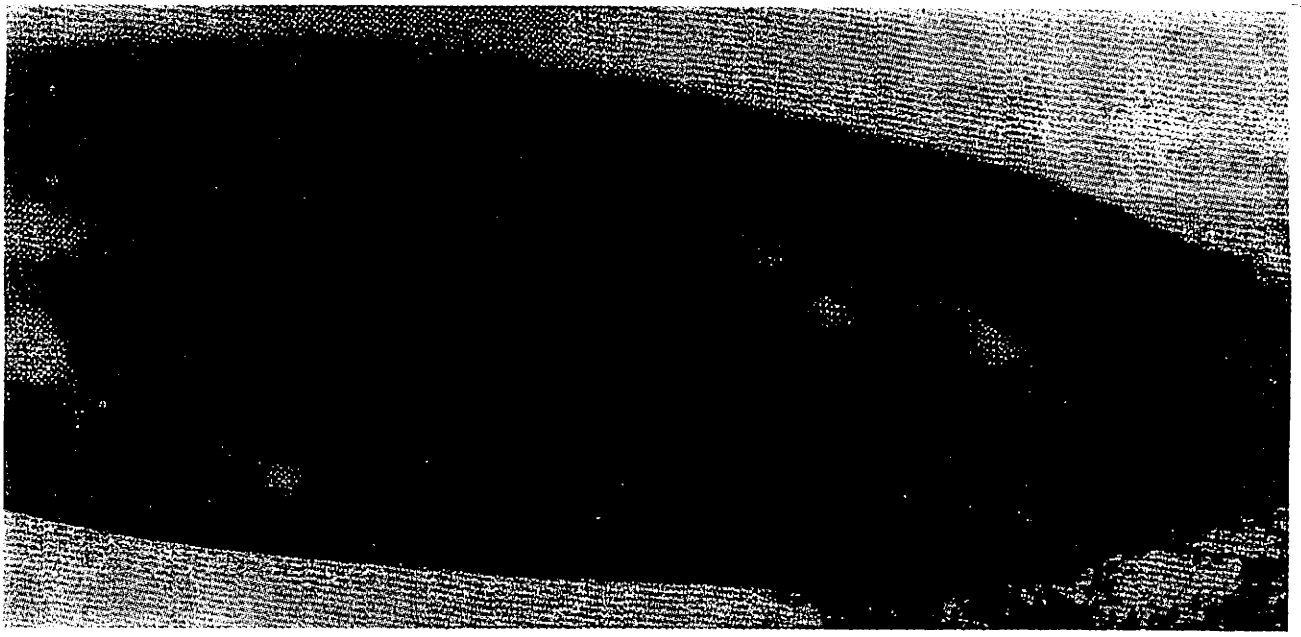
「おい、あれを見ろ！」

太陽の方向から奇妙な銀色の丸い物体がやって来る。約百ヤード彼方の地面に降りて、盛り上がった土の向こう側へ隠れたが、数秒後にまた現れた。すると急に物体は縦になって、ヒューッという音を発しながら空中を急上昇した。これが出現中に聞こえた唯一の音だった。

調査の結果、興奮のあまりスティーヴンは二十五分の一秒のかわりにバルブで約一秒の露出を切ったことがわかった。その結果、写真はボケたのである。

「その物はドームや丸窓（複数）のつい

●1952年12月13日，パロマー・ガーデンズに超低空で飛来し，アダムスキーめがけてネガホルダーを投下した円盤を，その直後に助手のジェロルド・ベーカーが撮影したもの。右頁の円盤と同一物体である。



●コニストン円盤（上）

●スティーヴン・ダービシャー（左）とエイドリアン・マイヤー

た固い金属のようなもので、下部には三個のコブがあった。底の中心はもっと黒くて、円錐型のように突き出ていた。最初は三つの丸窓が見えたが、物体が少し回転して四つの窓が見えた。上の方のキャビンドームの頂上にハッチのような物があった」

と、このようにスティーヴンは話したが、更に説明した。物体の直径は四十フィートで、銀色のガラス状の外観を呈しており、光は透過するけれども、透明ではない、金属またはプラスチックに似ていたという（彼は半透明を意味したようだ）。

最初、医師であるスティーヴンの父親は息子の話を信じなかったが、写真が現像されてから納得した。少年スティーヴンは新聞記者やUFO研究家連のインタビュー攻めにあったが、あくまでも元の体験が真実であることを主張し続けたのである。

彼の円盤の説明はアダムスキーが撮影したという円盤写真と一致するけれどもスティーヴンの両親は、彼がアダムスキーの第一著「空飛ぶ円盤は着陸した」を全然読んだこともなければ、その概要すら見たこともないという本人の言葉が本当であることを確証した。しかし彼は、ロンドンのイラストレーテッド誌でアダムスキーの円盤写真を見たことはあると述べた。

スティーヴンが言うには、円盤には四つの丸窓があったというが、彼が見たアダムスキー撮影の円盤には三つしかなかったという。これはもと掲載用にトリミングされたのである。

正射影法によると、スティーヴンの見た円盤はアダムスキー円盤と同じ正確なプロポーションを持っていることを示している。両者がしめし合わせたとみるのはあまりに考えがたいので、この場合は問題外である。

セシル・B・デミルの名カメラマン、ベブ・マーレーは「アダムスキーの写真がかりにトリックだとしても、かつて見たことのない優秀なトリック写真だ。これはフーディーニの魔術に匹敵する」と指摘した。円盤についている影と地上のそれとは見事に一致しているので、トリックとは考えられないという。

英国の「フライング・ソーサー・レビュー」誌の最近号は、アダムスキーの名声を弁護している。同誌はアダムスキーの体験を確証する多くの実例をあげているが、特に一九五三年十月八日、アダムスキー型円盤を目撃したというF・W・ポター氏に言及している。この特殊な目撃事件は「イーヴニング・ニューズ」紙に報道され、ポター氏はイングランド、ノリッジのきわめて評判のよい市民で、アマチュア天文家でもあると述べてある。「円盤・宇宙・科学」誌第十一号に、ロナルド・W・J・アンスティーの記事が掲載され、その中で彼は宇宙開発に触れて、「スプートニクやアメリカの人工衛星によって発見された諸状態は、新しい知識ではない。宇宙空間で見つかった増大する放射能活動やその他の状態は、数年前にアダムスキー氏が報告している」と述べた。

アダムスキーの体験記や写真に関してはもっと深いものがあることは明白である。それらがインチキだとすれば、だれがでっちあげたのか？　個人的にアダムスキーに会った人はだれでも、彼が素朴なくだけた人で、巧妙なトリック写真を作れるような人でないことを知っている。

多数の人に同じような円盤写真を撮影させたり目撃させたりして、アダムスキーの主張を確証させるような世界的規模の陰謀を、一体だれが仕組めるだろう。あれやこれやの疑問が解決するまでは、私の心は開いたままである。

アダムスキー撮影のUFO写真について

ティモシー・グリーン・ベクレー記

一枚の写真には一千語ほどの価値があるといわれている。だがたしかにアダムスキーの場合、彼の写真類は一万語ほどの価値がある。彼の三著書に光彩を添えているこれらの写真は、長年月の試練に耐えたし、たしかに科学的にも反論できないものであった。

しかしまだ広く公開されていないアダムスキー氏撮影のカラー実写映画は、もっとセンセーショナルなものだろう。アダムスキーの親しい知人であったワシントン市のマデリン・ロドファー夫人は、

自宅の裏庭で撮った8～9分間のフィルムを所有しているが、この映画は二本の木の間に停止している円盤の着陸装置をはっきりと示している。この球型装置は円盤が一方へ少し傾くときに見える。ロドファー夫人の家でこの映画を見たキャンザス州トピーカのハリー・M・フリーノーという人は二本の木の間へ出て、円盤の直径が少なくとも二十二メートルはあったらしいことを発見した。また彼がその映画を見たとき、〝この世の物ではないような〟不気味な感じがしたと言っている。

味方が一人は、いる

アダムスキーの写真類はヒナ囲いとピンポン球を接着剤でくっつけたのだと言うのは最も容易なことである。しかしこうした写真が容易に偽造できるとしても、これはアダムスキーの写真にはあてはまらない。実際、彼のいわゆる土星その他の天体へ行ったという話は無視できるとしても、そして少し想像力を働かせて彼の最初の砂漠のコンタクトすら無視できるとしても、彼のスチル写真や映画に対するすぐれた釈明を見い出せるのである。たしかに小さな模型を写した写真というものは、素人でも容易に見破ることは可能である。

おそらくアダムスキーは自分の体験のすべてを洩らしたのではないだろうし、あるいは体験にかなりのフィクションをつけ加えて話をボカしたのかもしれないが、それでも彼の体験記のどこかに光り輝く一条の〝真実〟がひそんでいると私は確信する。彼が自分の主張する出来事のすべてを実際に体験したか（または政府やサイレンス・グループの手先であったか）の充分な解明は不可能だろう。しかし彼の写真類はおそらく今日までに撮られたUFO写真のなかで最高のものだろう。少なくとも私の心の中には、この事件の完全な再調査結果が整理されている。そして我々が彼の写真の秘密を発見し得るまでは、ジョージ・アダムスキーに〝対抗する〟のではなく、〝味方をして〟いる人間がここに一人は存在するのである。

ジェロルド・E・ベーカーの証言

アダムスキーはパロマー・ガーデンズで円盤を撮影したばかりではなく、若い助手であったジェロルド・E・ベーカーも、少なくとも一枚の写真を撮った。

一九五二年十二月十三日付の次の証言は、アダムスキーが撮影した円盤がたしかにパロマー上空に出現したという直接の傍証である。

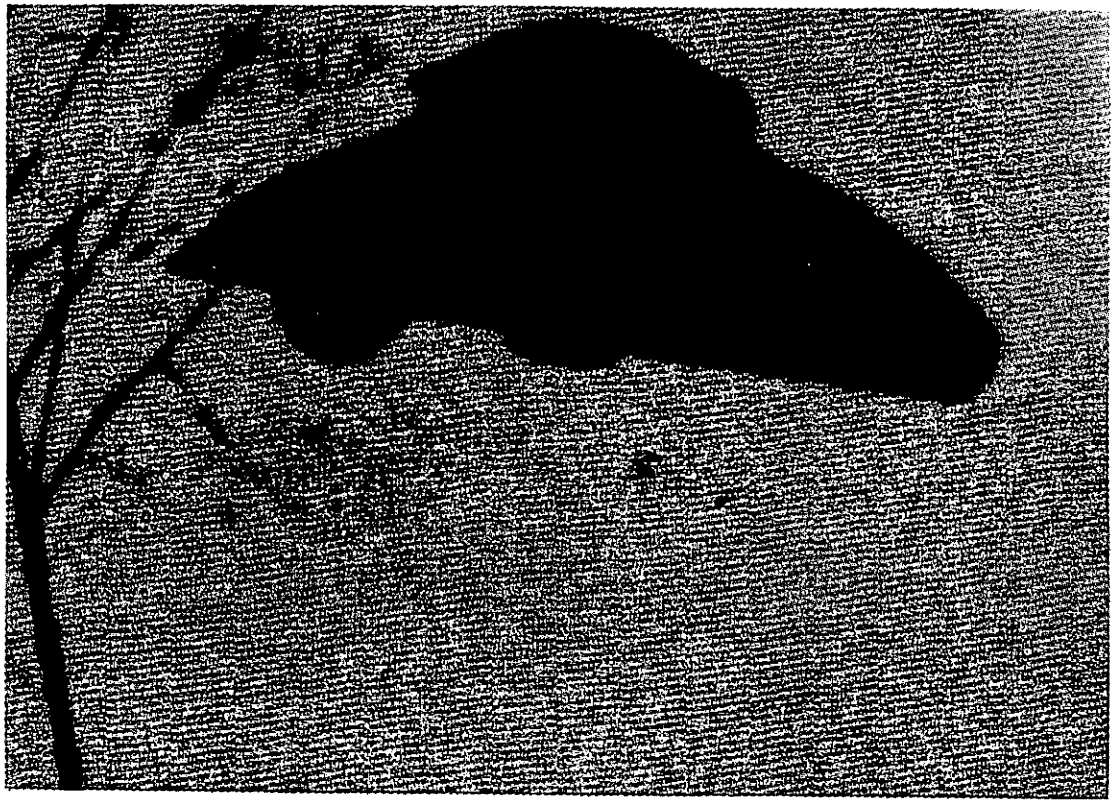
（訳注＝これは退役軍曹ベーカー氏による未公開の貴重な文献である）

関係者各位

私は米空軍で教官として勤務しておりましたあいだ、ジョージ・アダムスキー教授及び、UFOの実在を証明する方向にむかって教授が達成していた仕事について知ったことはまことに幸運でした。

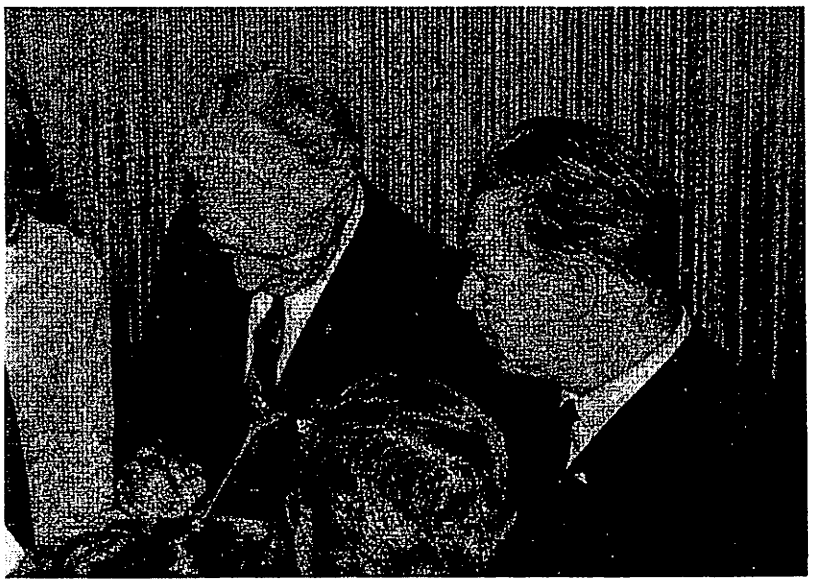
一九五二年十月二十九日に空軍を除隊

●マデリン・ロドファー夫人が撮影した8ミリ映画のコマ



した後、私はカリフォルニアへ来て、教授の仕事の援助を始めました。

先週はきわめて注目すべき週でした。というのは、円盤の出現が確実に増加したからです。先週の中頃、我々二人（ベーカー氏とアダムスキー）で朝、円盤を観測しようではないかと提案し、二個所でそれぞれ待機しようと話しました。教授は望遠鏡とカメラを用意し、私はブローニーカメラを準備しようというわけです。私が軍務に服していたことから、写真を撮るのはきわめて重大なことであるのを知っていましたし、また木曜日と金曜日は軍用機が低空で飛び回って、UFOを探索するかのようにその地域を旋回することにも注意していました。



●1963年5月，デンマーク，コペンハーゲンの講演会場でサインをするアダムスキー

土曜日の朝、暖炉にくべる薪を切っていたとき、教授が私を呼んで、沿岸の方からやって来る一機の円盤らしい物を見たと言うのです。私は丘の水ポンプの所まで駆け登り、大きな木のそばに立ちました。そこからは沿岸一帯をよく見渡せるのですが、円盤は見えません。私は特にほぼ真北にあたる山上高く立っているマイクロウェーブ塔の方を見ました。その前夜、私と一緒にいた少年に、その方向に滞空している円盤を指摘してやったからです。約十分間、見つめて待機しましたが、何も起こりません。

突然、視野の片隅に、教授がいた場所の方向から円形の物体が樹木の頂上すれすれに飛ぶのが見えました。たしかに円盤です。あまりに低く飛ぶので、その狭い開拓地に着陸するのではないかと思ったほどです。私は一瞬待ちました。こちらへ次第に接近するにつれてショックを感じたからです。すると円盤は私が立っていた所から約七・五メートルの位置で高さはせいぜい三・六メートルぐらいの空中に停止しました。私が写真を撮ろうとしてそこで待ち構えているのを知っていたかのように停止したのです。急いで写真を一枚撮りましたら、円盤は少し傾いて、想像を絶するスピードで上方へ急上昇しました。もう一枚撮ろうと思って樹木のかげから走り出たのですが、パロマー山の方へ飛んで行く小さな物体が見えただけで、やがて完全に視界から消え去りました。

振り返って見ると、教授が広場の反対側のヤブの中から出て来るところで、私は自分の幸運に非常に興奮して、こおどりしました。円盤が超低空だったので、教授が望遠鏡を用いて写真が撮れたとは夢想もしなかったのですが、四枚撮ることに成功したと私に話してくれたので、我々はすぐにカールズバッドへ行くべきだとしきりにすすめたところ、教授は同意し、私はフィルムの残りを撮影済の側へ巻き込みました。

（訳注＝カールズバッドはパロマー・ガーデンズから六十キロ離れた町で、ここに住む営業写真家D・J・デトワイラー氏がアダムスキーUFO写真類の現像焼付を一手に引き受けていた）。

物事があまりに急速に発生したので、私はまさに円盤に接近していたのですが、写真を撮ったという興奮のあまり、円盤に接近する機会があったら、あの部分を見てやろう、この部分を知ってやろう、というような考えは吹き飛んでしまいました。円盤が私の視界に二分間以上も存在していたとは信じられないほどです。

ただし次の事実を私は確実に知っています。

1、円盤は音を出さなかった。

2、それはすぐれた知性に操られていた。

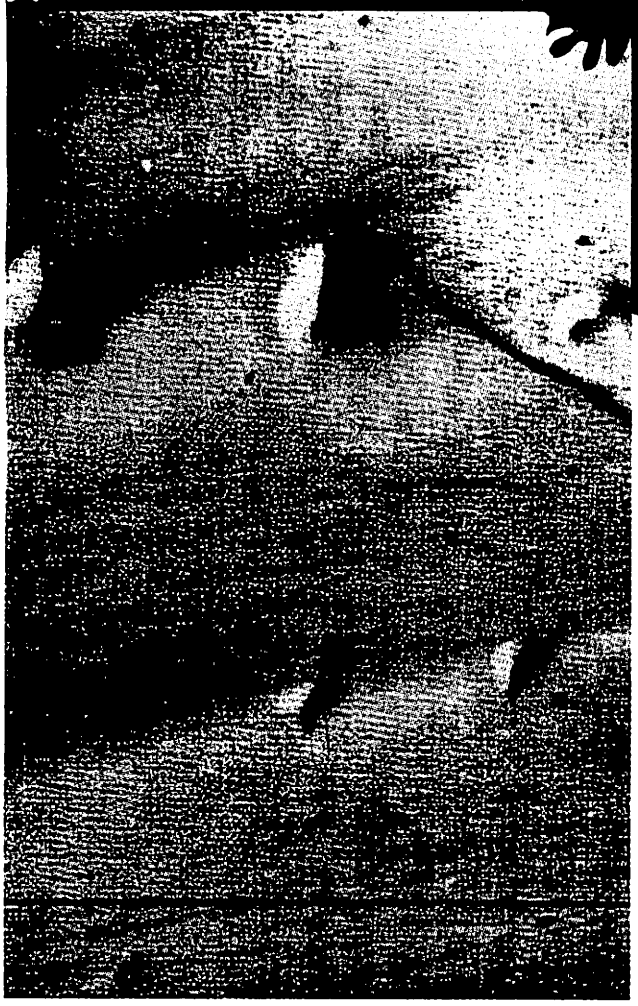
3、円盤が上方へ加速したとき、かすかなニオイがした。

4、丸窓（複数）と、着陸装置と思われる三個の大きな球が付属していた。

ジェロルド・E・ベーカー

写真で見る

謎と驚異の世界



▲受胎6週間後の約10㎜の胎児。水晶のように透明な水の胚の中で、すでに人間の形をなしている。だれがこの偉大な創造を促進しているのか？

◀火星探査機マリナー9号が撮影した火星の謎のピラミッド型物体。人工建造物？

◀ハエの複眼。角膜レンズが見事に整然と並ぶ中を白い毛が突き出ている。これはゴミよけの役目をする。驚くべき英知の表現体。（1450倍）

太陽が黄金色に見えた！

三日で大成功した筆者がその秘訣を説く

本誌にたびたび紹介した筆者・宮内温夫氏は本年三十三歳、日本GAPの古くからのメンバーで、アダムスキー哲学の熱烈な実践者である。昭和四十五年に大志を抱いて日本を離れ、まずカナダへ渡ってあらゆる辛酸をなめた後、米国へ移住してニューヨークに住み、世界最高の商業美術センターとして名高いプッシュピン・スタジオのミルトン・グレイサー氏に非凡の才能を認められ、以来同センター唯一の日本人イラストレーターとして米商業美術界に頭角をあらわしたが、昨年十二月には超一流雑誌「タイム」の表紙に氏の作品が掲載されるという栄冠をかちとった。これは日本人画家としては最初の快挙であり、同志の表紙に有名人の顔写真が掲載されるのと同じほどに難関である。

この偉業をなしとげた裏には、芸大の美術学部を四度受験して失敗し、進学を断念しながらも氏の哲学を基盤としてどん底におちいっても絶対に悲観的想念を起こすことなく、成功への強烈な信念と希望を持ち続けたという氏の高貴な精神と天才的才能が輝いている。「アメリカの美術界では日本のゲイダイは何の意味もなかった。通用するのは忍耐力と実力のみ。結果がわるくても努力したのだから大目に見てやろうという日本式情実は一切通らない苛酷な世界だ。まず〝信念〟という強力な基盤を持たなくては生きてゆけない」という氏は今回、本誌の依頼に応じてニューヨークからすばらしい手記を寄せられた。若くして氏が達成した悟りの境地は、読者に裨益するところ大なるものがあろう。

また宮内氏の母堂・節子さん（神奈川県逗子市在住）とお姉さんの啓子さん（ニューヨーク在住）もアダムスキー哲学の熱心な実践家であり、稀に見るすぐれたご家族であるが、温夫氏の手記と共に、母堂がニューヨークのご子息に宛てられた書簡の全文も、ご許可を頂いた上で掲載した。宇宙の高貴な波動に包まれたこの内容をも併せて味読されることをお願いする次第である。

私はアダムスキー氏の教えにふれて十年余りになります。それにもかかわらず遅々として進歩しない自分、同じ所をどうどうめぐりしている自分を情けなく思っていました。ところが昨年の暮から急に私の内部に変化が現れ始めました。なぜそうなったかという私の体験談が、少しでも皆様の参考になれば幸いです。

ア氏の教えが私の頭の中だけにあった間は進歩がなかったわけです。実践してこそ実りがあるのではないでしょうか。

■想念をチェックして マイナスの感情をなくす

まず基本的には(1)自分の内部から一切のマイナスを捨て去る必要があります。マイナスの感情をすっかりなくすことはむつかしいので、**少なくともマイナスの言葉をしゃべらない、マイナスの表情をあらわさないこと**、この二つを実行することが大切です。(2)次に、過去、現在にわたって嫌いな人が一人もいないようにすることも重要で、(3)もう一つ、「自分を知ること」、これも最重要です。自分を知らずして変化することも進歩することも他を知ることも、ひいては神を知ることもできません。なにはともあれ「自分を知る」ことです。それについては、ア氏の教えの中で最も大切な、自分の刻々の想念をチェックすることによって自分を知ることができるようになります。時々刻々の想念の変化をノートに書き記し続けることによって、自分の欠点と性格の片寄りに直面できます。その欠点を克服し、自分の弱さに勝つときに、より神の子としての本来の自分に近づくのです。想念のチェックは過去にさかのぼって行わなければ、深い所にひそむ欠点の根を引く抜くことは不可能です。言い替えれば、生まれてから今日までの自分の想念と行動を〝徹底的に反省する〟ということになります。宗教的にいえば、本物の徹底的反省から生じる感謝の気持が大きければ大きいほど、生命（神）に対する理解が深まります。私たちは習慣的想念の奴隷です。その習慣的想念（自己中心や自己保存の考え）を、本来の、他を生かす神の子としての想念のパターンに切り替える必要があります。簡単にいえば、良い想念を持つクセをつければよいわけです。詳細に書くと数冊の本になるくらいなので、要約しましょう。

(1)常に積極的な言葉を口から出す。常に喜びと輝きに満ちた百点満点の表情を顔に浮かべるように心がける。

(2)できるだけ詳しく具体的に想念をノートに記す。どんなときに自分の心がマイナスになるかを詳細に記して、なぜ嫌だったか、なぜ腹が立ったか、なぜ心配したか、なぜ困ったか、なぜ無理だと思ったか、なぜ羨ましく思ったか、などの原因を、できるだけ具体的にみつけ出して詳しく記入する。

これを実行すると九十九パーセント、自己中心、自我、我欲、自己保存がマイナスの想念のもとになっていることに気づきます。最初はイヤになるほどマイナスの想念が出てきますが、三週間、一カ月とかかさずに続けてゆきますと、次第に意識の囁き、すなわち神の啓示が多くなってきます。この意味で反省ほど大切なものはありません。なぜマイナスの想念や感情を起こしたか。この原因を知ることが最も大切です。

■数取り器を使用

ここで私の例をあげますと、想念のパターンを光に満ちたすばらしい想念に切り替える方法として思いついたのが数取り器です（編者注＝編者も以前この方法を思いついて実行したことがある）。

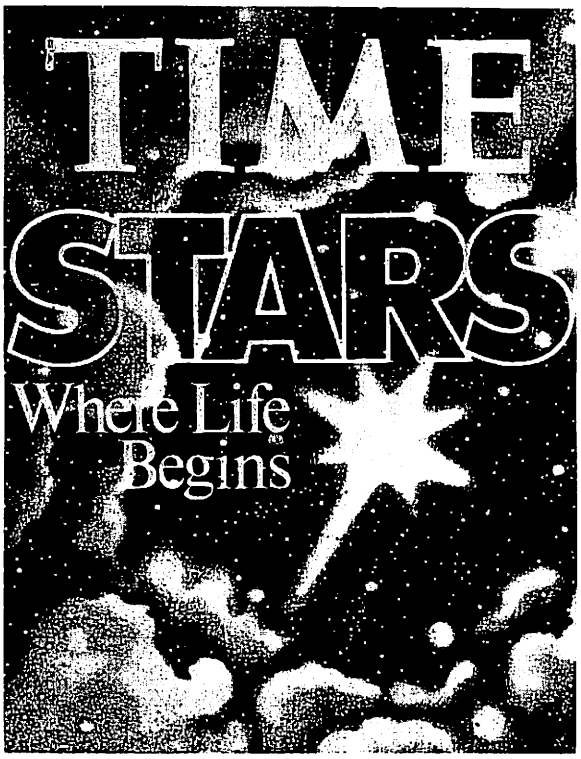
私は幸い仕事中にも左手に数取り器を持つことができますので、カチカチと数をプラスしながら、特に嫌いな人から始めて知っている人のすべてを自分のイメージの中で描きその人々が手を合わせ、神の光に満たされ、涙さえ流しながら「神様、有難うございます」と感謝の言葉を述べている光景をしっかり描いてあげました。嫌いな人は十回も二十回もイメージの中で右のように描いてあげることによって、二週間も続けるうちに、すっかり嫌いな人がいなくなってしまいました。これは自分にとって驚くほどの大きな変化で、本当に嬉しくなりました。なかなかむつかしいことですが、万人万物との一体を心の底から感じるようにするための第一歩として、嫌いな人をすっかりなくすことから始めたわけです。

■希望に満ちた言葉を唱える

これができるようになったら、次に、なるべく声を出して次のような積極的な事を唱えます。

「私は出来る！　いける！　万能の光と一体である。永遠の力と一体である。生命のエネルギーと一体である。私は信念は奇跡を生む。私は神の期待に答える。不可能はない！　うまくゆく！　今日は

●1976年12月27日号「タイム」誌。表紙イラストは宮内氏の作品



すばらしい日である！ そして健康、平和、安らぎがある！ 豊か！ 親切！ 素直！ 誠実！ 力！ 努力！ 信念！ 生命！ 宇宙！ 永遠！ 金星！、土星！」

以上の如く、なんでも好きな言葉を唱えればよいわけで、これは「宇宙の意識と一体である」と唱えるかわりに、もう少し実践できるピんとくる言葉に代えただけです。とにかく実践に際しては、できるだけ具体的で積極的であることが効果をあげる秘訣です。

このようにして、反省感謝の冥想を毎日一時間以上繰り返し、ノートに想念の動きの詳細なチェックを記し続けて、一ヵ月くらい経過すると、ノートの内容がすっかり変わっているのに気づきます。このとき自分の変化（進歩）を知るわけです。**ノートに記入しない限り、この変化は具体的にわかりません。**

■太陽が黄金色に見えた！

私は床に入るときも数取り器を持って横になります。そして気づいている間中積極的な言葉ないし「神、我とともにあり」と唱えては、そのたびに器械をカチカチ押して、眼が覚めるとまた同じように続けます。一日に千回から千五百回平均でやっています。これは実に効果的な方法で、八日目の昼の休憩時間に自宅が会社から近いので家に帰って一時間近く冥想しました。いつも冥想するときに、いろいろ唱えたりする中で、次の方法が効果があることがわかっています。

つまり、息を吸うときに、神の光、すなわち永遠の生命の光が自分の体内に吸入されるイメージを描きます。逆に、息を吐くときは、つまらぬこだわりや、小さい自分、エゴ、悪魔細胞などを吐き出すつもりで息を吐くのです。そうすると、次第にイメージの中に金色の光が満ちてくるようになり、冥想がますます楽しくなってきます。

ここで私が言いたいのは、皆様それぞれ自分に適した方法を考えて、それを実践して頂きたいということです。

そして冥想を始めてから八日目に、それを終えて会社（プッシュピン・スタジオ）へ行くために外へ出たところ、驚いたことに、**太陽が今までとは全然違って見えるのです。**生を享けて以来三十数年間なじみの太陽が、あたかも他の惑星から見ているかのように異なる物のように眼に映るのです。白色に近い金色の光が今までよりも全体に五倍くらい強くボワーッと見えるので、何度も振り返って見て自分の眼を疑いました。しかしこれはどうしようもない事実で、本などに「自分が変わることによって外界も輝いて見える」とあったのを思い出して、自分の精神的変化がこのように一つの現象として太陽が別物のように見えるようになったのかと思うと、歓喜の念で胸が爆発しそうになるのでした。あれから一ヵ月半になりますが、あの日以来ずっと太陽が以前とは違う状態で見え続けています。

■真の信念は形となって実現する

私たちはまず強烈な信念を持つ必要があります。そしてそれを実らすことが大切だと思います。「生命の科学」の終りにア氏が「アイデアは必ず実現する！」と述べています。信念だけで終わらせないで、花を咲かせてこそ真の生き甲斐があるというものです。言い替えれば、真の信念は必ず形となって実現するということでしょう。

想念をチェックし始めると、自分が如何に日々学んでいるかという事実に気づくようになります。職場で、学校で、家庭で、イヤーな思いをしたときこそ、自分の欠点を知る絶好のチャンスです。エゴの心は他人が自分の最も弱い欠点に触れるのを嫌がります。そのエゴを心の中から叩き出さねばなりません。自分の弱さや欠点を自分自身の力で暴かねばなりません。エゴに直面し、これを克服するときこそ、最大の勇気を要するときです。人生とは自分自身に勝つことだと思います。

以上の事柄を実践されますと、想念チェックのノートの80パーセント以上が神の啓示（意識のささやき）で満たされるようになるはずです。こうした事を基盤としないで、ただ奇蹟や良き現象だけを求めても逆効果を起こすだけです。要は教えを実践して、自分がよりよい自分に変化することが大切だと思います。

■感謝と親切の実践

反省、想念チェック、冥想（神との一体感）、これらは強ければ強いほど、深ければ深いほどよいわけですが、この三つのほかに感謝と愛の実践が必要です。愛の実践とは、今までよりもほんの少しだけよけいに愛をそそぐことだと考えます。無理をすることではありません。相手に応じて、昨日よりも今日はほんの少しよけいに親切にしてあげるのです。現時点よりも一歩踏み出せばよいのです。「愛」や「親切」に関する自分の限界を少しずつ破ってゆけばよいでしょう。そうすれば、いつのまにか大きく進歩している自分に気づくようになると思います。反省にせよ想念観察ノートにせよ、実践面で一歩を踏み出さない限り、ア氏の最高の教えも絵に描いたマンジュウでしかありません。ア氏の教えの中の言葉が具体的に何を意味するのか、これを自分自身の言葉におき替えて考えてみます。

ア氏が「愛」という言葉を使用しなかったのは、誤解を避けることと、宗教的にしたくなかったからでしょう。しかし私は少々「神」、「光」、「反省」「感謝」など、幾分宗教的な言葉におき替えることによって、より深くア氏の教えを理解できたのは事実です。

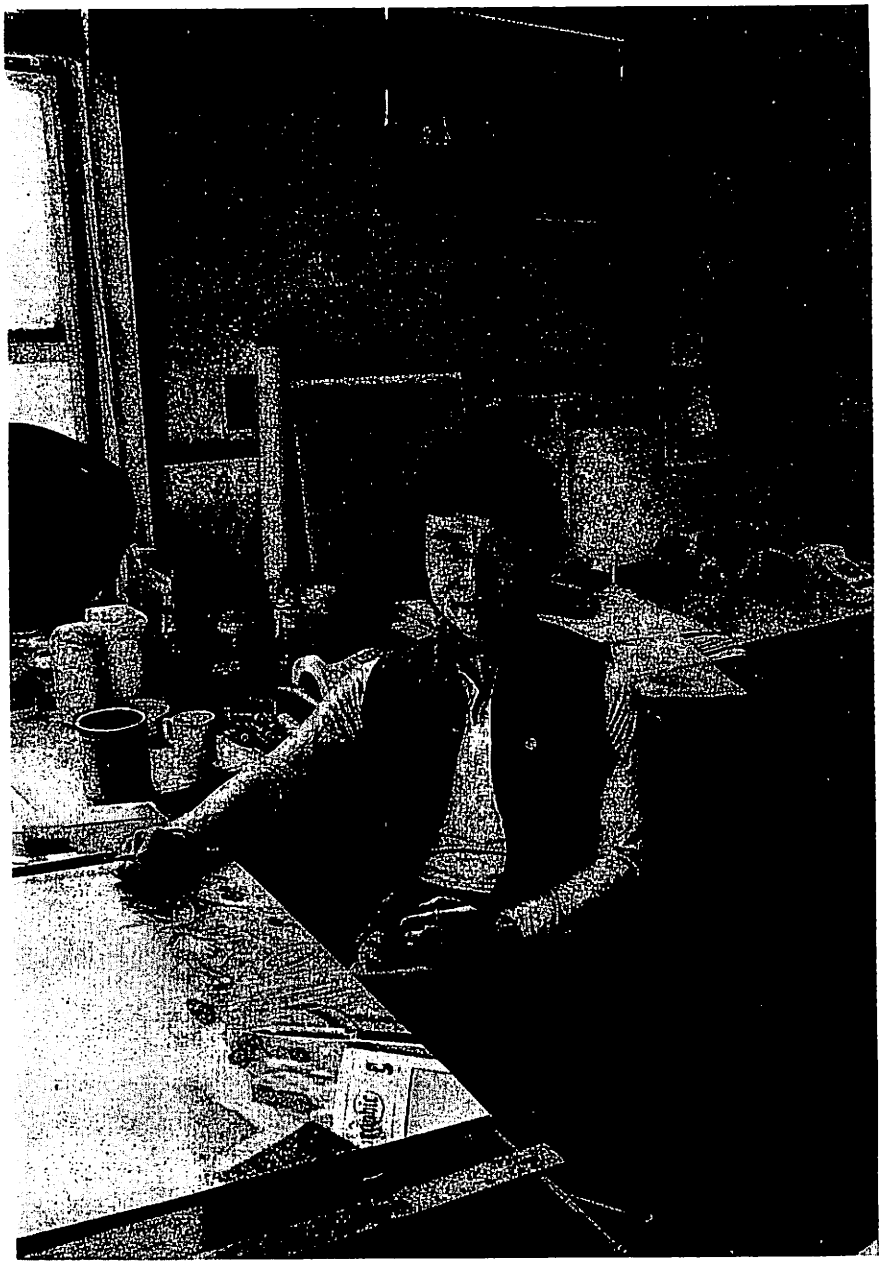
■学ぶチャンスは無限にある

学ぶということは何を意味するのでしょうか。学ぶために私たちは生きているのであり生かされていると称してもよいでしょう。ですから「学んでいない」ということは死んでいるのと同様です。一秒一秒学ぶためにこそ神が万人に等しくチャンスを与えて下さっています。その

チャンスを放棄している人が如何に多いことか――。学んで実践し、よりよい自分に変化することが真の喜びです。それが人間に与えられた責任、義務、権利であると思います。

というわけで、イヤーな思いをしているときこそ絶好のチャンスです。そのときこそあなたのエゴが学ばされている時です。そのチャンスに学びとることができなかったら、次のチャンスはいつ来るでしょうか。端的に言えば、嫌な思いをしているときこそ真の喜びであるとも言えます。そのときこそ学び、変化できるからです。

日本GAPの皆様、直面する難問に立ち向かう勇気を奮い起こしましょう！すべてはア氏の言う「信念の強さと決意」にかかっています。一度決心したら実行の一歩を踏み出しましょう！自分を永遠の生命の光の中へ導く師は自分自身の中に存在する宇宙の意識です。



●プッシュピン・スタジオで

＜宮内温夫氏の母堂、宮内節子夫人が、三月上旬、ニューヨークのご子息、温夫氏に出された書簡＞

温夫さん、啓子さん、レターありがとう。

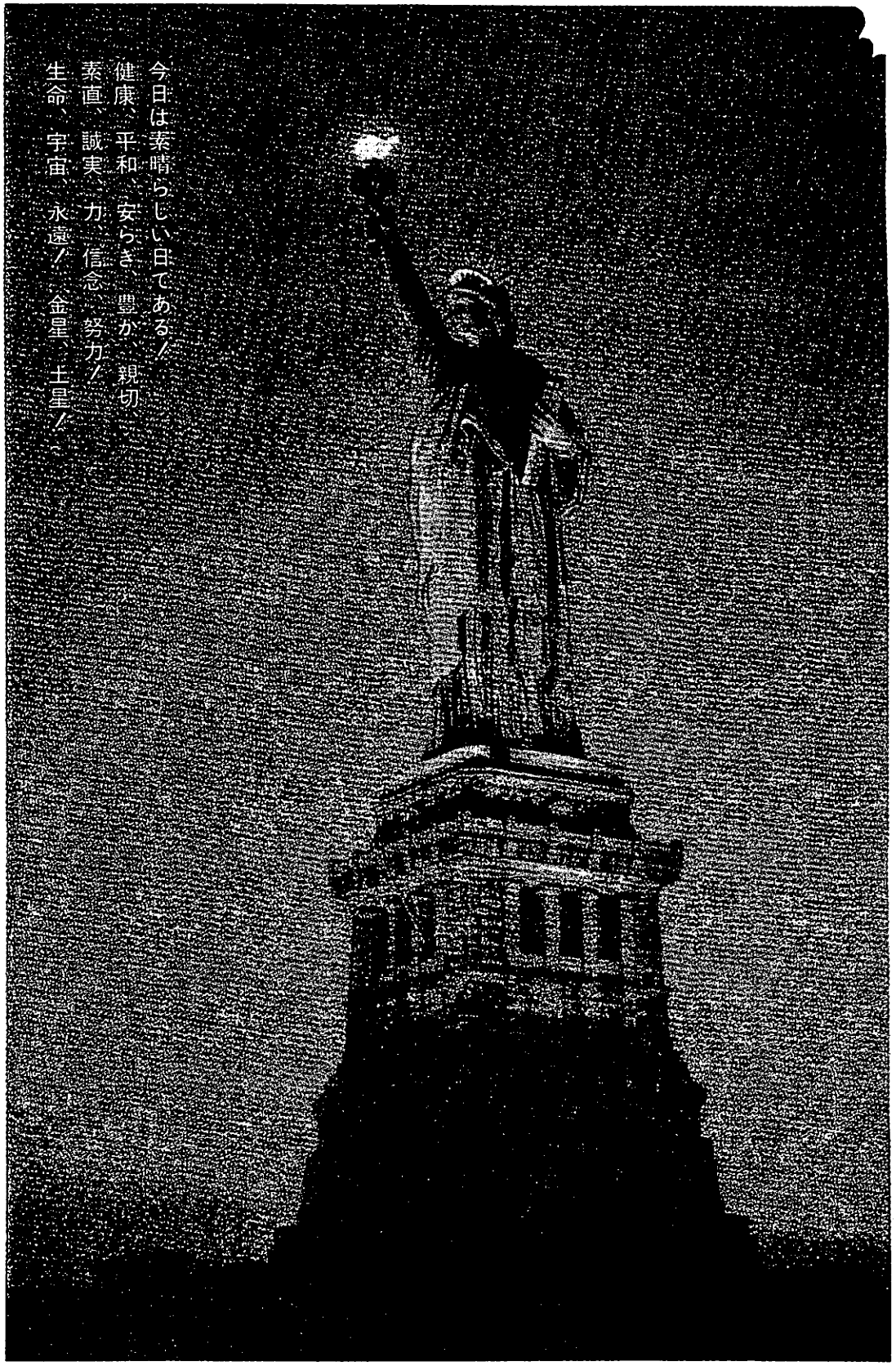
ニューヨークも雪が降ったり、もやもやする程、暖かい日があったりで不規則のようね。こちらもこのところ春を思わせるような暖かい日が続いてたのだけど、今日はちょっと寒い感じなの。おばあさんも本当の春の訪れを待ちかねています（編者注＝温夫氏の祖母。お父さんは亡くなられた）

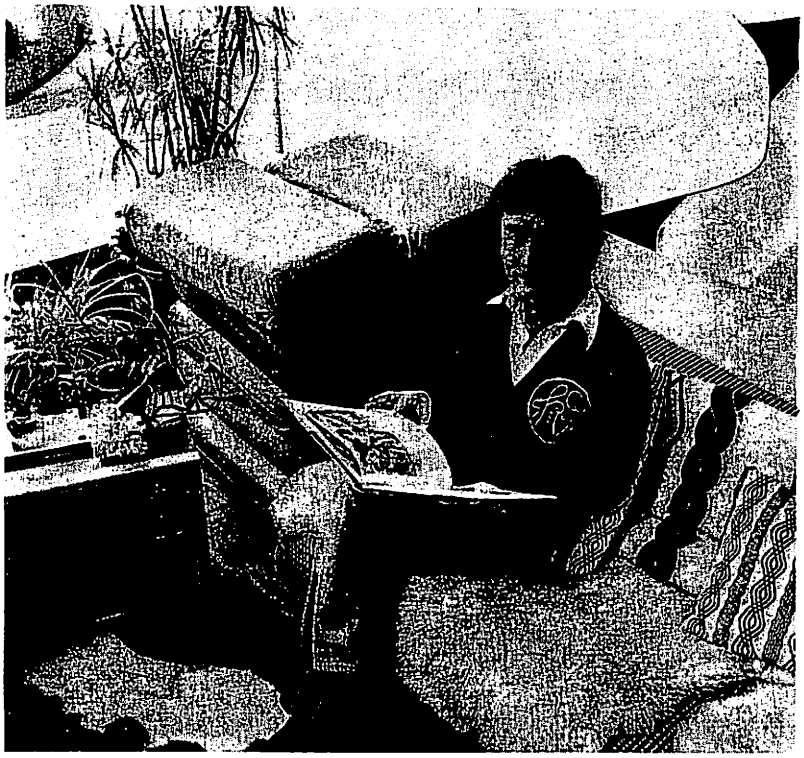
あなたからまた適切なアドバイスをもらって、とても嬉しかったの。私は「意識」という言葉より「神」の方が何だかぴったりくるような気がしてたので―。

現在の私には嫌いとか、憎いとか、恨むとか、マイナスの想念を送りたくなるような人は一人もいませんので、その点はあなたも安心してね。過去にそんな人があったとしても、その時は私も考えが足りなかったと思うし、すべて水に流してしまいました。

あなたのお友達が私の手紙のこと、たいそうほめて下さったそうで、恥ずかしくて仕様がありません。これからはお友達の言葉にも恥じないように努力しなければと思っています。そのためにもあなたのアドバイスを今後ともよろしく―。

次に私が冥想の時にうっとりして考えていることを書いてみます。それはね、私の体の中の、胃の後ろあたりに（なぜかそう信じているの）、直径十五センチ位


今日は素晴らしい日である！
健康、平和、安らぎ、豊か、親切、
素直、誠実、力、信念、努力！
生命、宇宙、永遠！金星、土星！



●アパートの居間にて

のまん丸い金色の光が（球体ではない）あって、そこに神（意識）が居られる。その光はまた宇宙の遙か彼方の父なる神と、肉眼では見えない光線でつながっている（体内の光はちょうど父なる神からのスポットの感じなの）。そしてこの光の中には英知、愛（完全なる）、慈悲、勇気、アイデア、エネルギー（力）など——、良きものが一杯で、それは汲めどもつきぬ泉というより、汲めば汲むほど（利用すればするほど）なお一層満ち溢れてくる。そしてこの光は体内のすみずみまで明るく照らし、あらゆる細胞の一つ一つにエネルギー（力）をお与えになっている。

そしてその細胞たちは、神の住居である私の肉体を完全なものとして維持してゆくために、互いに助け合い、調和して生き生きと、にこやかに、時には冗談を言ったり、歌をうたったりして、なごやかに、それでいて熱心に、自分の使命を果たしてくれている。

だから神の住み給う私の肉体は、常に健康で若々しく、美しきものであるし、何ものにもたとえることの出来ない宝の貯蔵庫となっている。この貯蔵庫を最高に利用するためには、常に常に内なる神を思い、内なる神を信じて「神と一体」とならなければいけない（編者注＝傍点はすべて原文のまま）

そのためには、心は今までの傲慢、貪欲、エゴを捨てて、本当に素直な、謙虚な、あの「放蕩息子」のようになって、内なる神の足下にひれ伏して許しを請い、全く生まれ変わった自分になって、神に従ってゆかなければならない。内なる神は、いつ、いかなる時も自分と一緒に居て下さり、慈悲のまなざしでみつめていて下さって、「放蕩息子」がおそばに帰るのを待っていて下さる——。ああ、なんと嬉しいことでしょう、有難いことでしょう！

と、まァこういうような訳で、この昂揚した気持がいつまでも続けばいいのだけど、現実はなかなかきびしくて、思うようにはゆかないのよ。

でも今の私には実行あるのみ、ただ前進あるのみです。温夫さん、啓子さん、私とでお互いに同じ目的に向かって頑張りましょうね。あなたはニューズレターにのせる原稿を書いているそうですけど、あなたのことだからきっと立流な原稿になると思っています。できたらテープに録音して送ってね。啓子さんのレターによりますと、彼女のところはお客さんが大勢で大変なようね。私があなたのところに居れば、何でも手伝ってあげられるのに——。

啓子さんが「他人から自分に奉仕してほしいように、他人にも奉仕してあげることのレッスン（編者注＝マタイ七・十二からの引用）へのチャンスだと思って出来るだけ他人への力になってあげたい」と言っているのには感心しました。彼女のことだからお客様に親切にしてあげられると思います。——といっても本当に大変よね。無理しないで頑張ってね（編者注＝啓子さんはニューヨークの一流日本料理店「エド・ガーデンズ」のチーフ・マネージャー）

今、あなたからの絵ハガキが届いたのよ。オリオン星雲の素敵な絵ハガキ！またまた嬉しいことを言ってくれて—。おばあさんも、ほんとに優しい、ええ子じゃとほめていましたよ。テープを楽しみに待っています。本当にア氏の教えは最高とか、すばらしいとかのほかに、ほめ言葉のないのが残念なくらいよ。

では温夫さん、元気で進め、進め、ひたすら進め！

私たちの合言葉「心に神を、顔に微笑を、口には感謝を」を忘れずに——。

編者注＝宮内温夫氏の勤務先は次のとおりである。日本GAP会員の方々から氏の記事に関する質問を歓迎するとの由。

Mr. Haruo Miyauchi
Push Pin Studios Inc. 207E, 32st,
New York 10016 N.Y., U.S.A.

宇宙霊想

文／浜田八郎

皆様こんにちは。本日は土曜日の午後のお休みの日にわざわざいらっしゃいまして、どうも有難うございました。今日この上野公園は大変な人出で、お花見の絶好の日和でございまして（この日約八十万人の花見客が出た）、それもたいへん結構なことだと思いますが、私どもはそれ以上に結構な事をここで研究して、善き生活を送るための〝原因と結果〟の、原因の方をつくろうというわけでございます。花見は別な日におやり頂きまして、今日は「生命の科学」第四課の「万物の相互関係」というところを解説したいと思います。

人間を救うア氏哲学

最初のあたりは、宇宙空間において、まず眼に見えない希薄なガスのような物が存在して、それが次第に物質化して、やがて星のような物が出来ると述べてありまして、この詳細は「UFOと宇宙」誌第二十三号に「星――生命の生まれるところ」と題するアメリカのタイム誌の翻訳記事に平易に述べてありますので、それをお読み下さるようおすすめします。このような科学的な、しかも非常にわかりやすい記事が世界の超一流の週刊誌であるタイムに堂々と掲載されるということは、日本の週刊誌とは比較にならない格調高い雑誌であるからだといえるでしょう。日本の週刊誌にあんな記事を載せても売れませんからね。それほどにアメリカと日本には大きな相違があるというわけです（ここで宮内温夫氏の業績を紹介する）。

そういうわけで、アダムスキー哲学は単なる空理空論でもなく、これを実践してそのとおりの生き方をすれば、世界的に有名な人間にもなれる可能性も出てくる実際的な〝結果〟をもたらすものであるということがわかります。

いわゆる宗教・哲学、特に西洋哲学や既成宗教は、現世の結果を求めないで、ただ自分の心が高まればよいという傾向がありまして、これはいかにももっともらしいですけれども、難解なカントやヘーゲルなどを学んで、しかも自分自身には一向に何の進歩も起こらない、実生活に全く何の変化もないというのは、私の考えでは人間を救う哲学ではないような気がするのです。たしかにカントやヘーゲルは大きな影響を与えていますけれども、やはり私たちは自分が独りで悩み苦しんで生きてゆくわけですから、その自分の苦悩を直接に解決してくれる思想でないと意味がないのではないかと考えられるのです。

その点、人間の実生活を良くしたり、商売をやっていれば繁盛してくるというような哲学こそ本物だと思います。こうした現世利益は新興宗教にもみられますが、アダムスキーの哲学はただ金儲けだけではなく、人間の魂を高めたり、更に宇宙的な人間にしたり、テレパシーその他の超能力の開発も可能にしたりするという、まことに結構ずくめな偉大な思想だといえます。

人間は変化しない

さて、テキストに返りますと、最初のあたりは、宇宙空間には電気エネルギーのようなものがあって、次第に物質が生じ、星が出来て、惑星がとり囲み、そこに人間が生じるという経過が簡単に述べてあります。しかし人間は自然に生じるのではなくて、別な太陽系にいた人間が移住してくるのです。太陽系といえども崩壊するときがきますから、そこにいた人類が大宇宙船に乗って、新しく出来た別な太陽系に移住しますので、その住み家として創造主が作られたのが惑星だと、アダムスキーは言っているわけです。したがって、この地球に自然に人間が生じたという人類学的な考え方は間違いだということになります。

そういえば、人間というのはある程度進化も退化もするでしょうが、案外さほど大きな変化をしないのではないかと思います。今から三十二年前の終戦当時の日本人と現在の日本人との間には、ほとんど差はないと私は考えています。顔かたちにも差はありません。今から百年前に撮影された写真に写っている日本人の容貌にもほとんど差はありません。こうしてさかのぼって、今から一千年前の平安朝時代の日本人の顔つきもほとんど変わってはいないでしょう。ものの考え方もそれほど変わってはいないと思うのです。違うのは知識の大小くらいのものでしょう。ですから人間というのはすごく進歩するようでありながら、実はそうでもない。たとえば千五、六百年昔の日本人の中で非常にすぐれた平和主義者がいたとしますと、その人の思想は現代の平和主義者とさほど変わらないだろうと思います。したがって、人間は自然に発生したものではなく、どこかの惑星から地球へ来たもので、永遠の昔から人間とサルとは別物だったとアダムスキーは言っているのですが、私もそう考えます。

地球人類は破滅の方向にむかっている

さて、宇宙空間に惑星が出来て、また滅びてゆきます。現在の太陽系もかなり危険な状態にあるとアダムスキーは説いたのですが、その頃彼は笑われましたものの、現在、地球自体が非常におかしな状態になったということは科学者が認めていて、北半球が氷河時代に入るだろうともいわれている有様です。地球の自転軸の狂いにも科学者が言及しています。これは大変なことでして、アダムスキーはどうしてこんなことを昔から知っていたのかといえば、それはスペース・ブラザーズから伝えられていたのでしょう。

今後、地球がどのような状態になるかという疑問に対しては、私の考えではまず〝絶望的〟です。私個人は悲観的、絶望的想念を起こさないようにしていますが、客観的に言って、地球は助からない方向に進んでいると思います。

異常気象が今後ますますひどくなってきますと、まず最も困るのは、たびたびお話ししますように食糧事情です。これが悪化しますと人間のあいだに闘争が起こり、戦争になるでしょうし、人為的な大騒動が発生して、一大破滅を迎えるようになるでしょう。エドガー・ケイシーが言うような、一挙に日本列島が海中に沈むとか、ヨーロッパの北部が一瞬にして沈下するというようなことは当分発生しないでしょうが、かりに発生するとしても、その前に人為的な出来事によって世界の人類の大半が死滅するときが来るだろうと思うのです。

とにかく人間というのは、食物が欠乏すると最も動物的な本能を発揮します。これは絶対的です。私が戦争中に旧軍隊にいましたのは血気盛んな若い頃で、初年兵の当時は腹が減って仕様がない。それで食物の奪い合いが行われるわけです。その頃私はある新興宗教の熱烈な信者でしたから、自分だけは絶対に他人の食物を盗んでまで食べたりはしないぞと心に誓っていました。むしろ自分の食糧を他の戦友に分けてやろうというほどの気持をもって、実際、ときどきそうしていたのですが、さすがに腹が減って、そんなことをしていると体力がつかないので、激務に耐えられず、結局、戦友に分けてやることはしなくなりましたが、まあとにかく、ひどい状態でした。しかも内地勤務でこの有様ですから、外地はもっとひどい状態だったでしょう。特にニューギニアあたりでは死んだ戦友の体を焼いて食べたという話が戦後伝わっていましたが、これはおそらく本当だろうと思います。

そういうわけで、食糧が最も重要で、これが不足すると大パニックが発生します。食糧どころか、数年前に発生したチリ紙不足のデマでも大きなパニックが起こっています。それぐらいのことでも大騒動になるのですから、食糧不足時代ともなれば大変なことになります。いつ、そんな状態が来るだろうかと推測していますが、いつか必ず到来するでしょう。

自分に自分が悩まされる

そのときに私たちはどうすればよいか？　ここが問題です。それにそなえて心構えをするための重要な要素になるのが今研究している宇宙的な哲学です。生きるか死ぬかの瀬戸際に、他人の物を盗んで食ったら、あるいは一時体が保てるかもしれません。しかし盗まないで清純な心をもって餓死したらどうなるでしょうか。おそらくもっと高級な惑星に生まれ変わるかもしれません。盗みの罪を犯して一時、命が永らえても、また生まれ変わるときには地球上のもっとひどい場所に生まれるかもしれません。それよりも、あっさり餓死して良き惑星に生まれ変わる方がよいにきまっていますから、そこで〝転生〟の問題が非常に重要な課題となってきます。一般人はこんなことを全然考えません。人間の生命は一代限りだと思い、死んだらすべてが無になると信じています。そのようなレベルで死んだら、また同じレベルの生まれ変わりを繰り返し、また悲惨な状態を体験することになるでしょう。しかもなかなか目覚めない。そして十五、六回の生まれ変わりの満期に達したら、本人のすべてが消滅するということになります。あるいは、そんな世界的パニックが発生するのは百年位先のことだ、自分たちの目の黒

いうちではあるまいと考えて、宇宙的な哲学などをやる必要はないと思う人もあるでしょうが、そうはゆきません。現実に私たちは毎日さまざまの体験をします。たとえば私などはささやかな事業をやっていますので、多くの人に接触しますが、ずいぶん多くのトラブルを体験します。ときには、むかっ腹が立ったり分烈感情を起こすことがあります。俗物ですから、もちろんそんなことはあるのです。この場合は「自分自身の内部に起こる分烈感情に自分が悩まされている」と言えます。他人に悩まされているのではありません。他人が何をしようが、自分の心は自分の所有物ですから、自分でそれを抑制すればよいわけです。しかし、これがむつかしい。自分はまだダメだなァと痛感し、それで私も救われたいばかりに、この会場へやって来るのです。

テレパシックな印象は細胞から来る

さて「生命の科学」の五十二頁に「知識を感受する方法」という小見出しがあります。ここでは人間の細胞をとり上げて、実際に知識を持っているのは細胞の記憶分子であると述べてあります。私たちは表面の心が何でも知っていると考えていますが、これは完全な間違いです。近代の科学で明らかにされたDNAやRNAが重要な知識の要素なので、これがもっと解明されますと、おそらくテレパシックな現象の原因が科学的に解明されるようになるでしょう。

この部分で述べてあるのは、かなり大ざっぱな説明ですが、もっと詳しく研究しようと思われる方には種々の参考書があります。細胞を研究する学問は分子生物学といいまして、専門書は多種類ありますけれども、一般読者にも非常にわかりやすく書いてある本がタイムライフ社から出ている「ライフ・人間と科学シリーズ」の中の「細胞と生物」という一巻です。これはすばらしい書物ですから余裕のある方はお求めになるとよいでしょう。（注文先＝〒112東京都文京区小石川五―六―九、ドミ小石川ビル、タイムライフブックス業務部「細胞と生物」21センチ×27センチ。二百頁の豪華版。定価三、四〇〇円、送料共）

この中に「設計技師DNA」「建築家RNA」というわかりやすい一節があります。ここには遺伝のもとになる設計図がすでに細胞の中に描かれていて、それが階段状で、こんな大きな図形であらわしてあります（図を見せて説明する）。

こういう書物で勉強されますと、アダムスキーの説いた宇宙哲学は非常に科学的なものを基礎として述べてあることがわかります。

さて、五十二頁に、「われわれはサイコメトリーに関して多少とも知っています。それによると、この術に長じた人は他人の所有物である指輪か時計を手に取って、所有者にリーディングを与えます。こうした特殊な人々は何ら疑惑を起こすことなく、やって来る印象類を感受するように自分を訓練しています。そしてこの印象類はこれまでに体験を持ってきた分子から波動となってやって来るのです」とあります。

体の中の微小な記憶分子から知識が伝えられて、それが脳のどこかで増幅されて、表面の心に伝わるという仕組みになっているようです。したがって心というのはラジオのスピーカー程度のものにすぎないといえるほど、いい加減なものです。それも内部の印象を素直に聞きとればよいのですが、人間の心は非常にわがままですから、印象に耳を傾けようとしない。すばらしいアイデアが一瞬浮かんだりインスピレーションを感じても、無視します。思いきってインスピレーションどおりにやればよかったのに、やらないで見逃がしたりして、「そんなことをしたってだめだ」と心が勝手に判断するものですから、物事がうまくゆきません。

このサイコメトリーで非常に有名な超能力者では、オランダのピーター・フルコスという人がいます。現在はアメリカに住んでいるそうですが、大変すぐれた超能力者です。ただし百パーセント的中するとは限りません。その的中しない部分を一般人はやたらと攻撃したがりますが、これは少々おかしい。超能力者に百パーセントの的中率を期待してかかる方が間違っています。

こうしたサイコメトリーを行う能力は人間のだれにも潜在するはずです。体の中には無数の細胞が存在しますので、当然私たちもすばらしい英知を持つ記憶分子や情報分子を持つはずですから、それに心が耳をかたむけるならば、テレパシックな印象を得ることが可能なはずです。しかし理論を口でしゃべるのは簡単ですが、実際に行うのはむつかしいですね。

紛失物を透視する

私の最近のテレパシックな体験をお話ししましょう。たいした事ではありませんが、私にとっては重要な体験です。

三月の半ばに私の貴重な品が紛失しました。それは小さな手帳型の住所録で、事業の関連先や個人的に親しい人々の住所や電話番号などがぎっしりと書き込んであります。これは第三者にとっては何にもならない物ですが、私にとっては商売道具ですから、これがなくなるとえらいことになります。二日間ほど会社の自分のデスクのまわりや自宅の書斉の中を徹底的に探したのですが、見つかりません。大切な物なので、ふだんはポケットに入れないで、カバンの中に入れています。会社から帰った夜、自宅から横尾忠則先生に電話をかけようとして、カバンの中から住所録を出そうとしたところ、見あたらないものですから、これは会社に置き忘れたのだろうと思いましたが、翌日会社へ行って探したけれども出てこない。少々気がかりになってきて、その翌日の夜、就寝前に、こんなときこそテレパシーで探知しなければだめじゃないかと自分に言い聞かせて、暗い室内でフトンの中へ入り、瞑目し、心で考えることは一切やめようと思い、一種の想念停止の状態にし、次に、その愛すべき電話番号帳が見つかって「ああ、ここにあっ

た！」と大喜びしている光景を描き、そのあと、今実物の存在する場所が見えるのだというフィーリングを高めていましたら、まもなく部厚な書類綴じがパッと浮かんで見えました。たしかに青い表紙のファイルが、暗黒の中にカラーで一瞬はっきりと見えたのです。これだ！ と思いました。そしてやっと思い出したのです。実は二日前に私がその電話番号帳を机の上に置いて、あちこち電話をかけたあとで、ある書類を調べるために、経理主任が保管している青い表紙のファイルを持ってくるようにと命じて、それを開いて書類を開いて見ていましたときに外部から電話がかかってきたので、開いた書類の所に私の電話番号帳を目印にはさんで閉じたまま忘れてしまい、それを経理主任に返したわけです。これは完全に私の記憶からなくなっていました。滅多に出さないファイルですから、そのままロッカーにしまい込んだら、あるいは半年ぐらいはわからなかったかもしれません。

これはテレパシックな印象ではなくてたしかに目を閉じていて、テレビの画面を見るようにファイルがパッと見えたのですから、一種の透視ではなかったかと思います。

それで、その翌日は土曜日で会社が休みだったのですが、あるいは経理主任が出勤してはいないかと思って、朝電話をかけて尋ねてみますと、たしかにファイルの中に小さな電話番号帳がはさんであったと答えますので、私は大喜びして昼頃会社へ行って受け取りました。それで折角都心まで出たのだから、ついでに紀伊国屋書店へ行ってみようと思いたって、新宿へ行ったわけです。私はある心理学関係の参考書をかねてから探していました。それで正面入口のエスカレーターで二階へ上がった頃に、ふと強い印象がわき起こってきたのです。千葉市にお住まいのGAP会員である鈴木伸一さんのことが思い浮かんできまして、「ここで鈴木さんに会うかもしれないぞ」というフィーリングが起こったのです、しかし広い東京都内で知人に偶然に会うことはまずあり得ないことで、まして親しいGAP会員の鈴木さんが紀伊国屋に来ているとは私の心では考えられないことでしたから、印象は強く起こったのですけれども、そのことはまもなく忘れて、奥の心理学のコーナーの所へ行って、良書を見つけましたので、それを手に取って、これを買おうと思い、体をひょいと後ろへ向けたら、そこに鈴木さんが立って、ニコニコしながら「こんにちは」と声をかけるではありませんか！ 実際、驚きましたね、あのときは。私はかなり大きな驚きの声を発したのですが、とにかく一緒に店内の喫茶室へ入ってお茶を飲みながら、私が今さっき感じたフィーリングのことを話したりしたあと、電車で一緒に帰途につきました。

私はこうしたテレパシックな体験がときどき起こりますが、これは常に、テレパシーの能力が自分に内在するのだという強い想念を持つことと、それは必ずいつか出てくるのだという信念をもって絶えず練習をしていないとだめだと思います。私の体験では、練習を続けていると必ず開発できます。これは自転車や自動車の運転能力がだれにも潜在するのに、練習しなければいつまでたってもだめなのと同様です。練習さえすれば、超能力の開発は可能なはずで、いくらやっても全然だめだというような性質のものではありません。

私自身はたびたび遠隔透視の練習を行っています。暗黒の室内で目を閉じて、ある光景を見ようというわけです。指向性をもたせようとするのですが、なかなかうまくゆきません。私はマンションの八階に住んでいますが、ある夜、正面玄関の光景を透視しようと思って、ジーッと見ていましたら、裏の夜景が見えました。見たいと望む場所が自由自在に見えるようにならないとだめだと思うのですが、これも不断の努力を続ければ、いつか成功するでしょう。

そういうふうに、超能力を開発することは宇宙的な生き方をするための重要な要素ではありますが、ここで注意しなければならないのは、たしかに超能力者は世の中に沢山いますけれども、超能力が多少はあるからといって、他人に対して親切な行為をなすような求道的精神を持たずに生きても無意味ではないかという点です。超能力を見せものにするだけで、他人を救うことを実行しなかったらだめではないかという考え方も起こります。超能力など全然持たなくても、現実に苦しんでいる人を救う方がよいではないか、金がなくて困っている人がいれば、少しでも金を貸して助ける方がよいではないか、とも思われます。一体どちらがよいか、ということになるのですが、これは両方共そろえばよいわけです。つまり超能力を持つとともに、他人を助けようという愛の精神も強く持てば、これが宇宙的人間といえるでしょう。

その両方ともそろうような人間に仕立て上げてくれるのが、このアダムスキー哲学だと私は思います。この哲学は偏っていないですね。「生命の科学」は実にすごい哲学でして、およそ新約聖書に匹敵するものとしては、これをおいて他にないと思います。これ以上のものはまずないでしょう。

観察される個体は〝自分〟である

さて、五十七頁の「テレパシーを開発するには」という小見出しの所に、大変重要なことが述べてあります。

「この大いなる英知と共に働くに際して友星人が用いる方法は、心のかわりに自己の意識でもって万物を観察することにあります」となっていますが、重要なのはその次です。

「わかりやすくいえば、彼らは観察される個体があたかも自分であるかのようにその個体について意識的になるのです」

これが最高の秘訣であろうと私も自分の練習や体験によって思います。たとえば、ここに台があります（講演者用の台を指さす）。これは物質であって生きものではありませんが、この台を見た場合に、「これが自分だ」というフィーリングを起こします。つまり自分がこの台の

●5月1日，新潟市の海岸にて。ここでしばらく海を見つめた。
（左より星，蓮沼，浜村，足立，編者，日山，石川，平山の各氏）

中へ入り込んで、台になってしまった自分が、逆に自分の方を見ているのだ、というような一種の意識の交流が行われるようになれば、この台を作るために用いられた木が、もと何という樹木であり、いかなる過程を経てここに存在しているかということが大体わかってくると思います。あるいは人間同士の場合、私がだれか他人を見るときに、「この人は自分である。私が相手を見ているのではなくて、私となった相手が自分を見つめているのだ」というフィーリングを起こすのです。自分の姿を鏡に映して見ている場合、実は鏡の中の自分の姿も、こちら側の自分を見ているのだということが哲学上でいわれていますが、それと同じような意識をもって他人を見るようになるならば、これが他人の心を知る方法の基盤になります。母親が幼児の我が子の気持をよく知っているというのは、常に子供に対して意識を向けていて、一体化しているからです。これも一種のテレパシックな現象といえるでしょう。

これは実に重要な理論でして、こんなふうに説かれた思想書は他にありません。ですから次に「人間が一定の基準としなければならないようなパタン（型）は存在しません」とあるわけです。つまり、こうでなくてはならないとか、ああでなくてはならないというような「ねばならぬ」という自分自身だけの基準をつくったらだめですね。たとえば、自分がこういう生き方をしているから、他人もこうでなくてはならないと思い込んでいたら、もう他人の行動に対して腹が立っ

て仕様がないという状態になります。そんな個人の基準など存在しないんです。ただ自分と姿かたちの異なる他人とは、内部の意識において、生命において、一体であると思わないことには〝救い〟はないですね。そのことが次に述べてあります。

「全く等しい二人の人間は存在しないからです。したがって本講座は他の修養団体のごとく一定の信条を設けたりはしません。ただあなたの内部で働いている意識的な英知に気づくようになればよいのです。そうすればこれはあなたの思考上の習慣となるでしょう。そして心と英知（意識）とは今日見られるような二つの分離体としてでなく。一体化するでしょう。これが友星人が進化した方法であって、そのゆえに彼らは言葉を発しないで万物と会話を交わすことができるのです」

人間が伝え得る思想として、おそらくこれは最高の思想だろうと思います。

宇宙冥想とは

私がここで皆様方の前で立っているときも、道を歩行中も、公園ですごい人混みの中を歩いていても、心と内部の宇宙的な分子との一体化は一種の冥想によって行われます。ただし冥想といっても特殊な姿勢を保って目をつむることを意味するのではありません。これを私は「宇宙冥想」と名付けています。この宇宙冥想は簡単な方法であって、だれにもできることで、特殊な姿勢や行法を必要とせず、ごく自然に行動していて、しかも内部の宇宙の意識と一体化できます。眠っているときは心も眠っていますが、覚醒時ならば、いつでもどこでもやれるはずです。

そういうわけでこの第四課は非常に重要な説明です。つまり、観察される個体があたかも自分であるかのように個体について意識的になるという方法です。

これは他人を見てそのようなフィーリングを起こす練習をしてもよいのですが、実際には犬、ネコ、小鳥などの動物を対象にしてもよいですし、あるいは海岸へ出て砂浜に立ったままで広大な海をジッと見つめて、「この海水はすなわち自分である。自分である海水がもう一人の自分を見ているのだ」という一体感を起こす練習とか、または樹木に近づいて、「自分が樹木を見ているとき、実は自分である樹木がもう一人の自分を見ているのだ」というような一体感を起こします。これも宇宙冥想です。これはすばらしいですね。しかし海や樹木を見つめている自分の姿を他人が見たら、オカシナ人間だと思うかもしれません。その場合は「よし、私を笑っているこの人を宇宙的にしてあげよう」とばかりに、こちらから宇宙的想念をパーッと送ります。すると相手が感応したら笑うのをやめて静かに去って行くでしょう。まさに宇宙的ですね。

こんなことを口でしゃべるのは簡単ですが、なかなかむつかしい。しかし自分がそういう生活態度をとるようになったイメージを描いただけでも、すばらしいことではありませんか。私は田舎に住んでいました頃、海に近いものですから、ときどき海岸へ行って海を見つめながら一体感を起こす練習をかなりやりました。終日、ネコの子一匹いない広漠たる砂浜で、ただ独りで海を見つめてすごしたりしたものでした。

とにかく万物一体感を単なる観念でなく、実際に起こす練習をして、そのような生活態度をもって生きる人こそ本当の宇宙的人間だろうと思います。練習の難易は別問題として、やはりこれは私共が実行した方がよいだろうと思うのです。時間がまいりましたので、今日はこれで終わらせていただきます。どうも有難うございました。（計一時間）

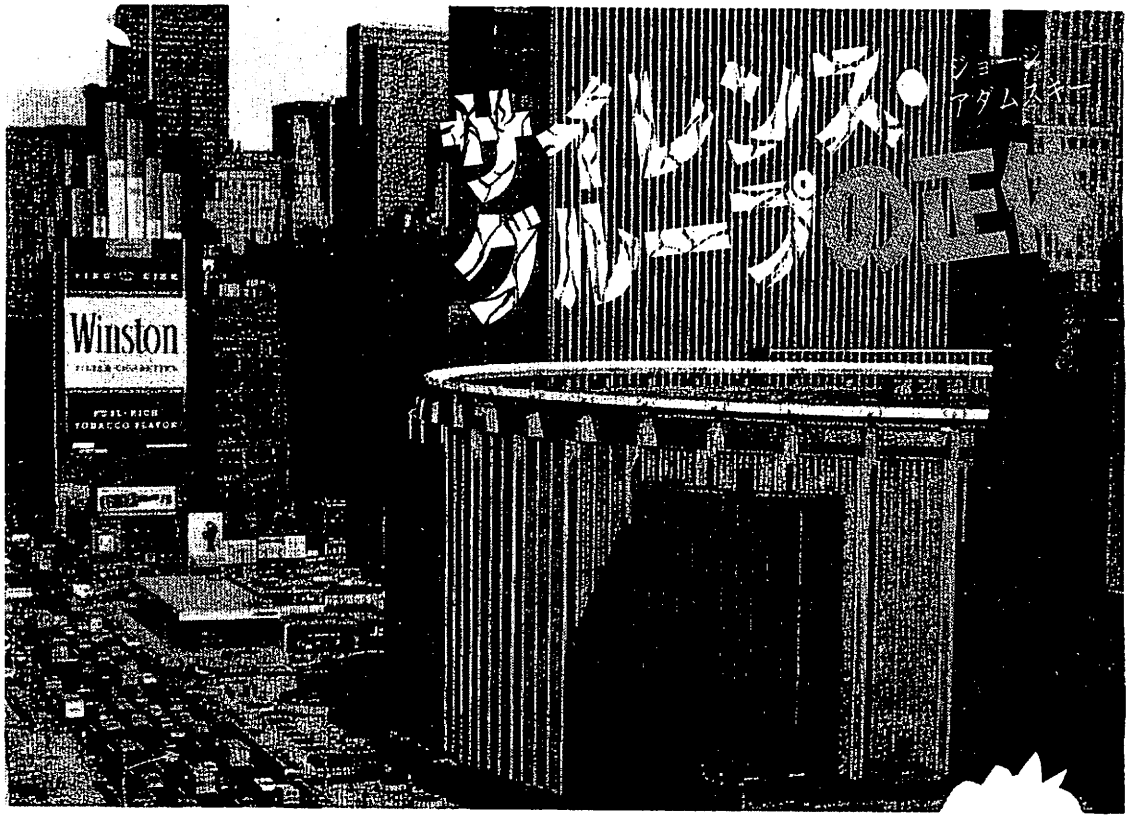
付記　「宇宙冥想」というと、大げさな響きをもつようだが、実際には簡単な方法である。自己の体を形成する全細胞が宇宙の意識に生かされた〝生きもの〟であるというフィーリングを起こし、心は常に内部から来る啓示を感じ取るようにする。また万人を形成する細胞も宇宙の意識（創造パワー）により生かされている宇宙的存在であるから、その意味で万物一体感を起こし、他人や外界の事物を見るときは、〝見られている自分〟がもう一人の〝見ている自分〟を見ているというフィーリングを起こす。これが、宇宙冥想である。

問題はこうしたフィーリング（感覚）にある。心による思考ではない。思考を超えた感覚的態度が重要である。難問の解決に考えあぐんだ場合は、まず考えることを中止して、インスピレーションがわき起こるのを待つ方がよい。こうしたテレパシックな直感力を高めるには、注意力を土台とした受身の姿勢を保つようにする。これをア氏は警戒の状態と表現しているのである。

この宇宙冥想は四六時中絶えず行うのがよい。ということは常に創造主の意識（英知、パワー）を感じ取るように自己訓練を行うということである。これは仕事中、歩行中、休息時等、いついかなる場合でも実行できる。また、自分をそのような感覚体に仕立て上げてしまうことが超能力開発の基礎ともなり、イメージを描いて希望事を成就させる方法をより一層容易ならしめるのである。これは努力すれば漸進的に可能となる。少しでも求道精神を持つ人なら決して不可能事ではない。

遠い過去から現代に至る地球上で「自分によって観察される客体があたかも自分である」かの如きフィーリングを起こす自己訓練を行った人は殆どいなかったと思われるし、そのような方法を伝えた思想や哲学もなかった。これを実践する人がいるとすれば、地球上に潜入してひそかに暮らしているスペース・ブラザーズぐらいのものだろう。

編者はこのフィーリングにこそ人間革命を生ずしめる最重要なキイが秘められていると思う。これこそ「自分を超感覚者に仕上げる二十一世紀の新しい哲学」の先取りとなるだろう。外界を見るときに視覚に頼らないで〝フィーリングで見る〟という生き方である。



サイレンス・グループの正体

ジョージ・アダムスキー

UFO研究者やコンタクティーを脅迫し、UFO研究界を混乱させるサイレンス・グループの正体は何か？ 編者も国内の或る不気味なUFO事件二種類に巻き込まれて危うくGAP活動を破壊されそうになったことがある。これはアダムスキーが語る初公開の秘話！

スペース・ブラザーズの教えの促進活動に関する私の公的生活を通じて、私の所へ多くの機関がやって来た。そのなかにはFBI（連邦捜査局）、CIA（米中央情報局）、AFI（空軍情報部）、国務省、その他の政府機関の人がいる。この特殊な人々が私を黙らせようとしたことはない。サイレンス・グループには多くの面があり、その多くを私も大衆も知っていないと思うのである。

サイレンス・グループとは何か

サイレンス・グループとは何なのか、だれがやっているのか？ キーホーが言っているように、ありそうな、非公式なグループがあるし、米国の各情報部よりももっと極秘にされた公式なグループもある。

最近ワシントン市へ旅行したあいだに、UFO問題の真相に対抗するサイレンス・グループが、ある種の神秘主義宗教が現れるのを待ち望んでいることを私は知った。そうなると次のように言うかもしれない。

「それみたことか。UFOなどはみな神秘宗教の産物なのだ。この宗教を確立させようとしてやっているのだ。UFOの実在の基礎はありゃしないんだ」

言い替えれば、彼らはあらゆるUFO問題を破壊しようとして、このような説明をするだろう。私を沈黙させる目的でやって来た人たちは宇宙人ではないことを、私は確実に知っている。彼らは地球人なのだ。

このサイレンス・グループが、オカルトや心霊の分野にいる人を妨害しないのは奇妙である。この人々は言いたいことが言えるし、脅迫したり沈黙させようとする人はいない。

彼らは、かつて私が哲学上の指導者として活動したことのあるかつてのグループのことに言及して、私の体験をゆがめようとしてきた。このグループの名はロイヤル・オーダー・オヴ・チベットといった。しかしこの団体は神秘主義の教義に固執したのではない。私が講演のかたちで述べたレッスンの多くは、ロングビーチとベバリーヒルの各種ラジオ局から放送されている。このことが重要な問題だと思う人は私の講演のコピーが各放送局から入手できると思う。このレッスンはだれでも知っているはずの宇宙的な概念から出た、生命の法則について純粋に哲学的に述べたものである。しかし、〝無知〟はそれをゆがめるのだ。

私の所へ来る郵便物から判断すると、プロテスタント、ユダヤ人、東洋人等、あらゆる宗教、あらゆる階層の人が、物理的・機械的な見地から、宇宙人の来訪というテーマに関心を持ち、支持してい

るのである。これが神秘主義の分野に入れられたら、だれも興味を起こさぬだろう。

なぜサイレンス・グループは暗躍するのか

以上が、サイレンス・グループが存在し、恐れている要素なのである。世界中の人々が〝宇宙人の来訪〟という問題にもとづいて考え始めると、両替屋（訳注＝金融制度を意味するらしい）の基礎は弱くなる。人々の目が上空に向けられ、友好的な宇宙の訪問者を求めて空を探索し、心は地球の平和と幸福に対する憧れで満たされるならば、同胞に対する憎悪で心を満たすことはむつかしくなる。憎悪の中にこそ戦争の沃土があるのだ。しかも宇宙旅行という魅惑的な思いに満ちた若者の心は、流血の戦場で待っているいかがわしい名誉の方にそれることはまずないだろう。これこそ資本家が恐れていることではないか。

つまり資本家は地球人類のあいだに平和と理解をもたらすかもしれないような出来事を恐れているのであり、一方、戦争ともなれば投資の対象となり、ある種の投資家は十分儲かるのである。ところが今や、世界中の無数の人が個人的なコンタクト事件について話し合っているのだ。

地球人にとって友好的で、しかも互いに平和に生きることを知っているこの大気圏外からの訪問者に関する知識は、希望を失った多数の人に新しい希望を与えるとともに、無数の人に新しい生活目的を与えている。世界の財布のヒモをにぎっている人が恐れているのは、これなのだ。別な惑星から人間が来る事実を認めるならば、現代の地球の経済システムに甚大な影響を与えることになる。万人がはるかに大きな影響を受けるだろう。サイレンス・グループはこのことを知っており、あらゆる手段を用いてこれと闘っているのであり、同時に、表面から巧みに姿を隠しているのだと思う。

三人の怪しい男が来た

「空飛ぶ円盤は着陸した」を出版してまもなく、三人の男が私の所へ来た。二人は以前に会ったことがあり、一人は未知だった。この男が権威ある態度を示して私をひどくおどかした。私が所持していたある書類を出せと言う。そこで相手に渡すと、あとで返すと約束したが、それぎりだった。彼らが何に関係しているのか全くわからなかったので、私は重要書類の一部分を渡さなかった。私が脅迫されたことは事実である。彼らは出て行く前に、UFO・宇宙人問題をしゃべるのをやめろと命じ、さもなければ私のあとをつけて監禁し、キイを拾ててしまうぞと言った。

宇宙人は肉体を持つ人間で、機械的な宇宙船に乗って宇宙旅行をしている事実を知って、そのことを公言している我々に対抗しようとして、宇宙人飛来現象をオカルトの分野に押し込む、あらゆる戦いの背後に存在している中心的党派はウォール街ではないかと思う。

（訳注＝ウォール街はニューヨーク市マンハッタンの南端にある区域で、アメリカ金融の中心地。ここの取引は世界経済の変動をあらわすバロメーターの役割を果たしている）

彼らはUFO問題のすべてをオカルトと呼ばれる心霊の分野に投げ込んで、世界中のまじめな人々の心に不信感を植えつけようとしているのだ。

飛躍した想像力

なお言いたいことがある。私の言葉は間違っていればよいが、種々の証拠によって、ジェームズ・モスレーと他の人間たちが、サイレンス・グループの手先になっている形跡がある。彼らがやっている事には金がかかるからだ。「空飛ぶ円盤は着陸した」はよく売れたけれども、私がそれによって得たものは殆どなかった。スポンサーなしに私は旅行もできないのである。モスレーや他の人間たちの場合は、だれが金を出しているのだろうか？　もちろん、だれかが彼らをサイレンス・グループの手先に仕向けているのだが、彼らはそのことに気づいていない。しかしその〝だれか〟はUFO問題全体に精通しているのである。

（訳注＝ジェームズ・モスレーは反アダムスキー派の暗躍者。アダムスキー問題をひどく混乱させた）

地球人は宇宙で最低の貧しい人間ではないと私は確信するので、この種の影響が宇宙からも来ることはあり得るだろう。しかし私に言わせれば――しかも私は世界中から手紙を受け取るので――、宇宙人が地球人を沈黙させようとしている形跡はない。

もし敵意あるUFOが現れたとすればそれは地球人側の恐怖の結果であると思われる。なぜなら、ひとたび恐怖の状態におちいると、人間は殆ど何も見えず、何も考えることができなくなるからだ。したがって敵意あるUFO出現例が発生したという証拠は、私は全然持ち合わせない。ただしこの地球のある勢力がそれに関係している証拠は豊富にあるようだ。

「ソーサリアン」誌に掲載された、私がパロマー・ガーデンズで撮影した円盤の丸窓（複数）から数名の宇宙人の顔が外を見ているイラストを見て、私は全く驚いた。その写真の丸窓を非常に注意深く調べてみると顔が見える、という話を聞いたことはある。しかし私が調べてみても、顔は見えない。だが、宇宙人が丸窓から私にメッセージを投下したとき、友の顔をチラリと見た。数名の顔が見えるというのは驚きである。しかし後に宇宙人に質問したら、一九五二年十二月十三日にパロマー・ガーデンズへ飛来したとき、円盤内には二人しか乗っていなかったということだった。人間の想像力には驚くほかない。

カール・ハンレースについて

ここでカール・ハンレースとジェロルド・ベーカーについて話したい。二人はモスレーの「ネクサス」誌一九五五年一

月号に、私の体験と写真の真実性を否定する証人として利用されている。

読者はウィルキンソンという名の男とともに、ハンレースを覚えておられるだろう。二人を宇宙船で別な惑星へ連れて行ってやると約束した〝宇宙人〟とコンタクトしたと称した後、一九五三年に謎の失踪をとげた男である。

私はジェロルド・ベーカーがハンレースの居所を知っていると思う。彼は別な惑星へ行ったのではない。彼が失踪してから広まった噂によると、彼はメキシコの国境近くにいるかもしれないという。

（訳注＝ベーカーとハンレースはアダムスキーがUFO研究活動を始めた初期にパロマー・ガーデンズを訪れて門を叩いた若者で、後に去って行った）

ベーカーが彼の居所を知っているという私の推理は、次のとおりである。

約二年前のある夕方、ベーカーと他の一人がパロマー・ガーデンズの私に会いにやって来た。ベーカーとの対談中、彼は新聞の広告の切抜きを見せるので、みると、ハンレースに連絡したい人は、ある郵便局の私書箱に手紙を出せとある。私は関心がなかったので、その新聞名と日付を記憶しなかった。

私がハンレースを知ったのは数年前にさかのぼる。UFOの写真を撮ろうという私の努力と、初期の写真の数点を「フェート」誌が紹介したとき、全米から手紙を受け取ったが、一方、あらゆる階層の人がパロマー山頂の大天文台を見学に行く途中、私の所へ訪問に立ち寄った。その訪問者のなかにウィスコンシン州から来た人がいた。彼は科学者で、帰宅してから私と会談したことを二人の仲間に話した。その一人がハンレースである。

その後ハンレースは個人的に私に手紙をくれたので、私たちはかなり長く文通を続けた。彼はすぐれた科学的素質を持っているようで、私は文通を楽しんだ。その後、彼の手紙は進展し、何かのトラブルを起こして、理由不明のまま次々と職を失ったという。やがて私は一通の手紙を受け取ったが、それによると私に会いに来る途中だとあり、ついに一九五二年十二月に所持品の一切を持ってパロマー・ガーデンズへ来たのである。無期限に滞在するつもりだったが、出費を補う金は持っていなかった。

ジェロルド・ベーカーも一九五二年十二月の夜遅く、似たような状態でやって来た。彼も我々ファミリーの一人として滞在し、あらゆる事を自由に自分で処理していたが、やはり金を持たなかった。

ハンレースの奇妙な機械

ハンレースが来てから一、二日後に、彼が私に洩らした話によると、磁気応用のある機械を作ったということで、それを使えば我々がパロマー・ガーデンズで消費していた電力を充分にまかなえるということだった。当時、我々は電力会社の供給を受けておらず、小型の自家発電機を使用していたのである。彼の話では、この機械は郷里の町の倉庫に保管してあるので、カリフォルニアへ送らせるつもりだという。そしてパロマー山腹の容易に発見できない場所へ埋めるのだと語った。私はすぐに好奇心と疑惑を起こしたけれども、ただちに応諾しなかった。そのことを知るにはまだ用心を必要としたからだ。

ついに、ふとした会話でその問題を話し合ったとき、その機械は円盤を引き寄せるとともに、それを墜落させることができると彼が洩らしたのである。

円盤を墜落させるぐらいならば、飛行機も墜落させるだろう。パロマー山上には毎日多数の飛行機が飛んでいるのだ。この点を質問すると、そのとおりだと彼は答えた。これは私の失策だったが、そんなことをすると人命喪失に対して我々は責任を問われることになるではないかと言ったのである。

すると彼は答えた。

「問題じゃありませんよ。我々は円盤が欲しいんだ！」

そこで私はその機械をパロマー・ガーデンズへ持って来るなと命じた。そしてこの事でトラブルが発生したのである。ベーカーが今起こしているようなトラブルが――。そのときまではすべてが順調にいっていたのだが、即刻ここを退去せよと命じたところ、ベーカーも彼と共に去って行ったのである。しかも出発直前にハンレースは私にむかって、パロマー・ガーデンズに隣接した私の所有する地所から去れと逆に命じた。相手は力ずくでこれを強制するかもしれないと私は一瞬思ったが、やがて彼は平静さを取り戻して、おとなしく出て行った。

ハンレースの言動が陰険で非愛国的であると考えた私は、この事をFBIに通報したところ、FBIは私の意見に同意し、呼ばれたことに感謝して、パロマー・ガーデンズの我々が報復されないように警戒策をたててくれたが、ベーカーが私をやっつけようとして用いるかもしれない手段に対して、FBIは防御策を講じることができなかった。

私は恐れない！

ウィルキンソンがウィスコンシン州からカリフォルニアへ来たときに、ハンレースの機械を持って来たという噂が広がった。私はこの事を全く確かめなかったが、ハンレースとウィルキンソンが蒸発したのは、彼らがカリフォルニアへ来てからまもない頃であった。もし彼らがメキシコ国境の向こう側にいるとすれば、そこへ機械を持って行ったことだろう。これに関してもっと情報が与えられるはずだったが、現在のところ、ない。

モスレーや他の人々が私に対する攻撃にベーカーを利用したければ利用するがよい。私は恐れない！

一方、私は、スペース・ピープルの真の使命を世界の人々に知らしめようとして、小さな声で――取るに足りない声かもしれないが――呼びかけるつもりである。

（編者注＝これはアダムスキー攻撃の旗頭であったモスレーが、去って行ったハンレースとベーカーを利用し、多くの材料をでっちあげて流したデマに対する一文である）

フレッド・ステックリング氏からの手紙

●来日要請にこたえたもの。

2カ月間に3千通の手紙が殺到！

久保田へ

アリスがあなたからの手紙を私に見せてくれたので，11月か12月に日本へ来いというあなたの招待に対して，ここにご返事をすることにしました。見学とGAPに関してお話しするために日本へ行くのは最大関心事となるでしょう。そう，私は喜んで行きますし，11月か12月が最も好都合な時期です。その頃ならば仕事も手がすくでしょうから，1週間ないし10日位なら出かけやすいと思います。

私はジョージ・アダムスキーとその哲学，そして最後に科学について話しましょう。GAPの真実とアダムスキーの業績を日本の皆様に再度もたらそうとするあなたを，最善を尽くして援助いたします。

また12月の素敵なお便りとクリスマス・カードに対し感謝します。もっと早くご返事できなかったのは，GAPに関する情報を得ようとして，突然，世界中の人々から多数の手紙が殺到したからです。2カ月間で約3,000通の手紙が来ました！

6月には数カ所での講演を予定していますので忙しくなりそうです。私の家は手紙や資料などで大きな事務所のようになりました。しかし（アダムスキーに対する）関心がよみがえるのを見るのはよい事ですし，心から真実を探し求めている人に回答するのは楽しいものです。

あなたが今夏ビスタを再訪問されることを望んでいます。あなたが来るのはこの上なく嬉しいことです。今夏来られれば多くの見せたい物がありますし，案内したい所も沢山ありますので，今度はもっと長く滞在して頂けませんか。

今日はこれで失礼します。お大事に。なるべく早目にお便り下さい。

1977年4月15日

フレッド・ステックリング

〈追伸〉しばらく前に2人の若い日本人女性がこちらへ来られまして，あなたが日本ですばらしい仕事をしておられると語っていました。

会員の声

シャングリラのきらめき

静岡県　波多慎一

空飛ぶ円盤は夏のまぶしい空にふさわしい。そして夜、何か光るものがあると、そうではないかと間違えることがたびたびある。そこで空飛ぶ円盤というものはどういうものかと考えた場合に、私がまず重要だとみなすのは、重力の束縛を離れたということであり、それが人間性の上に発揮された場合には、ジョージ・アダムスキーの如き高邁なる円満な人格者となる。だから円盤というものは、その進歩せる世界のイニシアルであり、ちらっと見せてくれるシャングリラのきらめきなのだ。

その登場のみぎりには、人間が未知のものにふれて驚きのあまり、従順な気持に、真に無垢になるがゆえに、やや宇宙人の精神の輝きを感じ得たと思う。ところが最近はそれがあまりに夥しい回数にのぼり、あっちでもこっちでも、この噂でもちきりなので、人間界の立場からこのUFOなるものを追求し、位置づけようとする。しかし、空飛ぶ円盤はあまりにすばしこくて、全然この要求にあてはまらない。だがしかし、もし親愛なるブラザーズが心を人間の方に向けてくれたならば、それが皇居上空飛来事件などのように、可能になるのではないかという希望はある。

「コズモ」の発刊に際しては、私はその事業が成功するかどうか心配していた。ところが私の想像をうらぎって、「UFOと宇宙」は売り上げをのばし、その反面GAP機関誌のニューズレターの方もおろそかにしていないということは、まったく私の杞憂をふきとばし、確固たる事業として存在するに到ったことは喜ばしい。

私は火星のニュースその他で、またニューズレター53号で発表した反アダムスキー哲学等によってディレッタントであるのだが、久保田氏のもつまじめな態度、めぐまれた体驅による努力は、ニューズレターにすがすがしさを発揮している。私は、空飛ぶ円盤があちらこちらに現れてきてくれるから「UFOと宇宙」は売れるのだと考える反面、アダムスキーがサマ師であると考えるのはどうも大人気ない、つまり、彼の宇宙旅行記はまったくのナンセンスなものではあったが、彼のとらえる宇宙人とまたその明るい世界は、どうも本物の円盤とそうかけ離れていないと考える方が妥当なのである。円盤はその登場のあかつきから現在に至るまで正体を現さない。そのことはまことに奥床しいのである。

夏の暑さというのは、火星に比べたら冷蔵庫の氷をつくるところに入ったようなもので、それくらい地球が住むに適したところであるにもかかわらず、もめごとが絶えない。それゆえ、わが宇宙の友朋スペース・ブラザーズはこの地球に大がかりに移住合体はしないのだということはすでに述べていた。

そして本当に彼らは聖人であるかどうかについて私は疑問をもつのだが、そこが暑いせいで、彼らはすべて無上の境地をゆく超越せる存在者であると思いこませてしまう、と考えてしまうのである。それゆえに、久保田八郎殿のやっている宇宙哲学なるものの重要性を指摘する余地はある。だがしかし、微々たるものである。

アダムスキーの第一の疑問点は、石膏をとって写真にとれなかった足跡、これが最大の疑問だった。（編者注＝写真に撮影されている）というわけは、写真に関して電気掃除器の頭部かどうか、そのような明瞭にわかることしか問題にしないで大事な点の写真は決して持っていないというアダムスキーのサマ師的な性格をみんなが認めることが出来ないというのは相当なことで、アダムスキーの魅力がまた私の不満となっていた。

それはみんなを引っ張る強力な力や強力な魅力がありながら、引っ張りきって安定するところまでもっていってくれないという不満なのである。だってそうじゃないか。円盤の中で会った長老が宇宙語で話をしたのにテレパシーは英語になっていること（?）と、精神以外の話題については何も語らない、ほんの少し労働とか娯楽について語る、その内容はすこぶる貧困なのである（?）。

早い話が「UFOと宇宙」という雑誌をみると、アダムスキーの弟子の久保田が編集しているから、その真相がすべてつくされているように書いてあるかというと、そういうわけじゃなく、はなはだ深遠微妙な問題として扱ってある。

日本GAPのリーダーの頭でさえその真相がわからないのに、その下っ端の私たちにわかろうわけがないのだ。だけどそれがわかりたくて日本GAP会員になっているわけだしまたその活動が衰えをみせない、衰退のきざしがまったくないということが私たちを勇気づけるのである。

それで私の気持は、何でもよいから、自分がしんから為したいこと、それに力をそそぐことにある。運命のわざわいの中でほんの限られた幸福はそこにしかないので、いうならば日本GAP並びに「UFOと宇宙」は陰気くさいこの世界の運命の中でほんのわずかだが、本当に人間があなりたいと望み、そういうことを知りたいということを知ろうとする幸福な行動の一環であろうと思う。

そこでいろいろなことを述べてまいりましたが、久保田八郎殿の健闘を祝し、また私に便りを下さることを懇願し、そしてGAP会員の方々が円満にその精神高揚の活動をなされることを希望し、私はまた空を見上げて、いったいどこから来るんだろうとまじめに考えることを誓ってとりとめないこの稿を終わることにしよう。

どうぞ、ご無事で、忘れないで下さい。よろこびが、あなたに続くことを。

不思議な夢

横浜市　熊沢田鶴子

昨日の月例会に初めて出席させていただき、楽しいひとときを過ごすことが出来て大変感謝しています。こういう時間でしたら何時間でも持ってみたいものです。そして偉大な人々と一緒に活動できることを大変光栄に思います。

私事で恐縮ですが、ぜひ夢についてお聞きしたいのです。どうして夢が実現するのかを。実は今度の月例会に出席して夢が実現したのです。そしてそれがとてもこわいのです。私はGAPの入会案内をいただいてから入会するまで一年を要しました。これはアダムスキー型円盤がニセ物であるという週刊誌が原因でしたが、それはすぐに偽りであることに気づきました。でも何とはなく離れてしまいましたが、アダムスキーに興味はありました。その離れた時期が実はアダムスキーを知るよい機会だったのです。今までなかなか手に入らなかった彼の本が次々と手に入ったのです。これは私にとって一大事件です。

ある日、夢を見ました。それがとても不思議だったので、ノートに記録しました。普通の夢ですとすぐ忘れてしまうのですが、この夢は現実にあったように良く記憶していました。

その夢は私達人間が――何名かいるのですが人数はわかりません――地下から細い洞穴を通いずって地上へ出て行くのです。すると牧場のような所へ出ます。太陽が空に出ています。そこは山々に囲まれた野原で柵の外側には小川が流れて橋が一つあります。私達は何かにひきつけられるように遠くの山々の上の空を見ながら柵のところへかけよります。私達は歓喜しながら――実際にこんなにうれしい気持になったことはありません――空を見上げて何かを待っているのです。しばらくしてアダムスキー型円盤が現れ、それは五機

あって、私達のいる所とは反対側の小川の向こうに音もなく着陸しました。そして内部から各々二人ずつ計十人の、オーソンと同じ長い金髪で同じ茶色の服装をした人々が出て来て私達に挨拶をしたのです。私達は心から歓喜して手を振り挨拶しました。ふいに私はロボットのような—実際はよくわかりませんが、それが私よりはるかに大きく、人間のような形をしていたのは確かですが——ものが私を抱き上げたのです。私はためらわずに全てをおまかせしますと言って、その後はわかりません。ふと気がつくと、顔の前の所だけ外部が見えるように丸くガラスのようなもので出来たシルバーブルーの金属のようなカプセルの中に横たわって、どこかへ私は運ばれる途中でした。外部の壁面は白と紺の結晶のようなもので出来た細い通路になっているようでした。それは後になって思ったのですが、テレビで宣伝している健康枕の中身にそっくりです。そしてそれが磁石と何かで出来ていることを見てこれだと思いました。

ふと気がつくと円盤の内部にいるような気がしました。ふいに誰かの声がしました。それはコンピューター的な声でしたが、確かに男性の声でした。とてもやさしい声でした。「どうしてGAPに入らない？」

別におこった様子もなく言いました。そしてふいに私の手が自然に両こめかみにつき、離れなくなり、自然に頭が上下に動きました。その時ふと計器やコンピューターのようなものを見たような気がします。そしてその後、精神感応の交換をしましたが、「このことはあなたの記憶から消しておきます」と言われたのでその内容はわかりません。そして、「初めてのGAP月例会には髪が長くて背広を着た人が待っている」と言いました。その夢を見てから気になりだして入会の手続きを取りました。

そして初めてのニューズレターを見て驚きました。髪が長くて背広を着た人の写真が出ていたのです。私はこの人だと思いましたが確信がありませんでした。そして月例会の日まで待ったのです。月例会へ行くと始めはその人がいませんでしたので単なる夢かと思っていましたが、途中から来て下さったので私は心臓が破裂してしまうのではないかと思うほど激しく胸が高鳴りました（編者注＝「髪が長くて背広を着た人」とは塙公明君を意味する）。夢が本当になったのです。私にとってこの事はもう夢の世界だけにおくことはできません。一大奇跡です。それでさっそくお手紙を書きました。この手紙を書いている今でも心臓が高鳴り手が震えています。

つい夢中になり多くを書きましたが、ぜひ久保田先生のご意見をうかがいたく思います。三月の月例会を楽しみにしています。寒い日が続きますのでお身体を大切にして下さい。GAPの皆様に祝福と幸いがありますように。

自分を客観視するフィーリング

東京　川谷定義

御健勝に御活躍のこと、お喜び申し上げます。十四日の月例会に参加させていただき、久しぶりに手紙を書きたくなりました。僕が上京してからもうじき五カ月になろうとしています。もうある程度東京の生活に慣れてきたと思います。でも朝夕の通勤ラッシュにはやはりこたえます。会社の寮のある調布市上石原から、まず京王線西調布駅まで約十五分を歩くことにより僕の一日は始まります。新宿で国電に乗り替えて職場へ行きます。

僕の会社は日本電気の販売したコンピューターを保守サービスする会社で、全国、あるいは海外にも点在するサービスセンターから実際のユーザーへ行き、コンピューターに発生した障害を出来るだけ短時間に直したり、障害が出ないように定期的に保守したりする会社です。僕の場合、来年から政府関係機関に納めてある極めて巨大な超大型のシステムを担当することになり、今年一ぱいは現場で机上と実習の訓練を受けます。

このコンピューターをちょっと紹介しますと、日本の三大コンピューターメーカーと電々公社が共同開発した、性能・規模の両面において世界でもトップクラスのシステムで、主に電々公社が用いています。一システムで二百台近くの各装置から成り、各装置も価格でいうと数百万円から数億円するものです。非常に大きなシステムであるにもかかわらず回路素子は無数なほどの集積回路から成り立っていますので、その複雑さは驚異的です。一人の保守員が一生涯かけてもこのコンピューターのすべてを習得するのは不可能だと先輩から聞かされました。そういえば今教えてもらっている先輩方も、いずれもベテランであるのに、まだ知らない部分が沢山あるようです。知らない部分の動作は、だいたいの流れをつかむことくらいしかすぐには出来ないそうです。

僕なんかまだコンピューターのコの字も知らないのですが、コンピューター技術には大きく分けて二つあります。コンピューターそのものに関するエレクトロニクス技術であるハードウェアーと利用技術であるソフトウェアーです。僕は保守員になりますのでハードウェアーが専門です。でも最近のハードウェアーにはソフトウェアーの領域がちょっと入り込んで来ています。それはファームウェアーというもので、装置の動作をコントロールする法則です。どのようにしてそれは行われるかというと、装置内の集積回路による記憶部にマイクロプログラムと呼ばれる、装置に対して希望するソフトウェアーの概念を記憶させておき、あとはそのマイクロプログラムの構成単位であるマイクロ命令というものを記憶部から一つ一つ読み出しては、その内容に従って情報処理のためのハードウェアー的な動作を行ってゆきます。動作の最少単位を実行するのに要する時間、つまりマイクロ命令一個を実行するのに要する時間は、数百NSEC（ナノセカンド。一ナノセカンドは10^{-9}セカンド）から数十ナノセカンドですんでしまいます。一秒あればかなりの量の科学演算業務、事務演算業務が可能です。今、米国や日本では超集積回路の開発を盛んに行っており、更に限りない瞬間と複雑化への挑戦が続いています。もし今の世界がカタストロフィーを受けずに続くとしたら、十年先のコンピューターがどのようになるか非常に興味深いものです。僕は今生においてこのような職業につくことができて、とても幸福に思っています。苦しいでしょうけど、常に勉強しないではいられない環境が僕を成長させるでしょうし、遅れたものであるとはいえ、〝創造主の法則による現象〟に含まれる密の、コンピューター内部の電子的な現象と接してゆけるのですから——。将来はできたら意識的な透視によってコンピューターの障害を診断してみたいなどと、普通の保守員が思ってもみないようなことを考えています。

話はアダムスキー哲学の実践のことに変わりますが、今僕がトライしていることを紹介します。一つは、出来るだけ多くの機会に、自分のそのときの姿を、外部から他人が見ているようなイメージを浮かべようとすることです。特に体を動かしているときに、外部から自分を見るようなフィーリングを起こすことです。高校時代に気がついたことですが、これをやると頭の中で渦巻いている習慣的想念がバカバカしくなって引っ込んでしまうような気がするんです。でも、つい忘れがちで、なかなかうまくやれません。

二つめは、誰かと話をしているときに、相手が話し出そうとする直前に相手の想念をキャッチすることですが、これはほとんど実行できたことがありません。悲しいことですがすぐに相手の口から出る言葉に頼ってしまいます。何か良策はないものでしょうか。

三つめは、自分が知覚力を習得して、意識的な毎日を送ったり、自分の正体を知った生活のイメージを描くことです。これは主に電車の中でやるんですが、現実の生活でまだそのような体験をしたことがありませんので、あまり強くて多様なイメージは望めません。なんとか練習を続けて、イメージの回数を増やさなければと思っています。

四つめは、これも電車の中でやるのですが、自己暗示法です。僕の持っている最大の希望は、自分自身の前生を思い出し、自分の正体を知ることです。いつも、僕は前生でどこにいたか、そこはどんなところだったか、どんな人々と一緒だったか、僕はどんな仕事をしていたか、そして僕はその時どんな人間であったかというようなことを少しずつ思い出していくように暗示をかけます。これも最初から目的が大きすぎるのか少しもそれらしい結果の一片すら現れていません。

以上が今僕がやろうとしていることですが、実行はむつかしいものです。三つめからあとは電車の中で行うのですが、ほとんどが朝の車中であり、帰りの車中は一日の仕事を終えて（といってもまだ勉強ですが）やれやれと思っている時なので、なかなかその気になれず、時々しかやれません。総合結果はどうかというと、まだ希望するほどのものは得られませんが、それでもほんの時たま自分が周囲のあらゆるものと一体であることや、〝意識〟の英知によって自分の体の無数の細胞が制御されていて、生命を与えられていることの実感を味わったりすることがあります。また時々フッといきなり知らない人の顔の輪郭が頭の中に浮かんだり、なつかしい小学、中学時代のことを思い出したりします。僕は意識的な知覚のある人間生活を目指す以外に僕の人生は考えられません。なんとかしてそんな世界へ入りたいと思いますし、なんとか自分の正体を知りたいと思います。

僕は今タイムライフというところから発行されている〝人間と科学〟シリーズの「細胞と生物」という本を読んでいます。「生命の科学」を読むと、僕が一番面白く読めるのは細胞に関して書いてある第九課です。そこで僕は、創造主の高度な創造物であらゆる生物の最少の構成単位である〝細胞〟に興味を持つようになりました。この本には写真と図解が豊富に載せてあり、とてもわかり易いので興味深く読んでいます。その序文でロックフェラー大学のルネ・デュボ氏は書いています。

「どんなに原始的であっても、すべての細胞は宇宙からの力を感じ、いまだ我々にはわからない機構によって、それに反応している」

それから、大人の一人の人間の体は約六十兆個の細胞から成り、毎秒約五千万個の細胞が死に、毎秒約五千万個の細胞が生まれているのだそうです。私達一人一人の体の無数の細胞を生かして調整している実体である宇宙の意識のすばらしさが少しなりともわかるような気がします。この本から得られる知識とイメージが今後の知覚力開発に役立てばと思って読んでいます。

今年も前進しよう

高知市　橋詰利光

新しい年を迎え、GAPの発展を確信し、先生の御清栄を念じています。

さて一月高知新年例会は七名の出席（稲瀬、浜田、釣井、多田各氏及び片岡、徳弘さん）で、九日午前九時より青年センターにて開かれました。新年の辞、創造主への感謝と誓い、「生命の科学」の第四課学習、そして五十一年度総会録音テープ拝聴、質疑応答、意見交換、そして昼食会を催しました（会費千円）。

アダムスキー最後の講演は大変格調高く感銘深いものでした。時間が少々不足してB面は次回ということになりましたが、全文ニューズレターに掲載されることになりましたので、喜んで居ります。

また、高知大会の写真と御紹介文有難うございました。

アダムスキーの伝えられた事柄につきましては、まだ充分には理解し得ません。読めば読むほど真理は深遠にして、奥深い気が致します。実に新しい第二のバイブルかもわかりません。しかしバイブル的観方であっては一寸問題があるかもわかりませんけれども——。

「生命の科学」は私共の唯一の光であり、より処となりそうです。地球のすべての人が速かにこの書を理解して頂けた時、地球はどんなに素晴らしくなるでしょう。この時をこそ私は夢見たいと思って居ります。

一九七七年、日本各地及び世界のGAPの会員の方々と、GAPの前途を勇気と確固たる信念をもって前進したいと思って居ります。先生には益々御健康に留意され、日本各地のGAP諸氏を御指導下さいます様心からお願い申し上げます。

透視力を開発

千葉市　中里信彦

二月十三日付のお返事ありがとうございました。手紙であるにもかかわらず、とても暖かい印象を受け、現在はだいぶ落ち着きを取り戻しました。

私の心の叫びはいつも「自由になりたい」ということです。私の過去の生涯がどんなもので、どんな原因によって現在のカルマが生じたのかはまだわかっていませんが、どっちにしても今は宇宙哲学に沿って生きていくより仕方がないと思っています。今生でも色々な過失をおかしてきました。そして自分ではいつも過去から逃れたい、もう終わった事なのだから忘れようと努力しているのですが、何かにつけて過去の失敗等が浮かび上がってくるのです。しかしこの努力もいつかは報われるでしょう。

この三年余りの間にずいぶん沢山の事を知り、また体験もしました。でも自分とは何かという事に関してはまだほとんど知りません。

亀田先生にお会いして宇宙エネルギーの吸収法等を教えて頂き、精神が高揚している時にはオーラも比較的良く見えるようになりましたし、床に入ってエネルギーを吸収していると、どこかの人々や建物、どこかの貼り紙、どこかの室のテーブルの上にある色とりどりの菓子類、鏡に写った女性の姿、カラーの時も白黒の時も、白とも黒ともつかないかすんだような風に見えることもあります。少し前まではそれらに動きはなく、一枚の写真を見ている様でしたが、この頃は人間の動いている様子も見えるようになりました。つい先日は一人の男が裸で右膝を立ててうつ向いて何かの動きを見せていました。五日には妹の音声を発していない〝声〟を聞きましたが、これは昼間階下で妹と同室にいて、そのあとすぐに確かめましたから間違いではありません。このような体験は三度目です。

去年の冬に妹の友人が遊くから来てその夜千葉のホテルまで送って行ったのですが、私はロビーで待ち、妹と友人は七階の室まで上がりました。少しすると二人の話し声と笑い声が聞こえてきたので、妹がロビーへ降りて来た時にそのことを話すと驚いていました。

しかしこれらはまだまだ初歩の段階だと思います。なぜならまだ自分の意図したものが見えたのはほんの二～三例しかないからです。まだまだ自分や人の役に立つというようなものではありません。

色々なアドバイスをありがとうございました。重ねてお礼を申し上げます。お忙しいなか、体に気をつけて頑張って下さい。

本当の愛とは

東京　鈴木達彦

先日の月例会で初めて身近に先生と接触することが出来まして、真にありがとうございました。入会して間もない私にとって、皆さんと共に心が融け合うことが出来、非常にす

ばらしい日でした。

先生の話されたカルマに関するお話は特に印象的でした。私も新たな気持でカルマの法則の認識をさせていただきました。あの時、先生が前生のことについてあまり話されたくなかったという事は、私にはとても強く感じられました。確かに私達はカルマの法則を学ぶ上において前生問題について知り、分析して研究する必要はありますが、それらにこだわることは避けるべきだと感じます。過去あるいは未来のいずれにしてもセンスマインドが勝手な執着を始めれば、その時から宇宙的なフィーリングが閉ざされてしまうわけですから……。その意味でもスペース・ブラザーズは常に新鮮でいることを重視しているのではないかと思います。私達は自らの生命を今こそ現すべきだとつくづく感じました。先生がおっしゃられましたあの雪葉「大切なのは、その人の現在の想念、生活態度であって、過去(前生)にどれだけ偉大な人物であっても、未来へ続いてゆく我々の開かれた生命を築くのには、そのカルマを現在の中に築かなくてはならない」といった意味のお話がいまだに印象に残っております。

そして更に感じられます事は、私達の生命が宇宙自体の一つの巨大な理想の具体化である以上、カルマの法則もまた決して単なる刑罰ではなくて、私達を進化へと向かわせる傾向におかれているにちがいないという事です。私達が百の力の苦しみを受けるならば、そのカルマを精算する道、すなわち悟りの可能性もまたその中に百の力をもって相対的に私達に与えられているにちがいありません。

語は変わりますが、最近私個人が非常に強く感じています事を勝手ながら書かせていただきます。

私達は決して宇宙的な生活態度を部分的に追い求めてはならないと思います。私はつい最近まで、自分は愛情深くあらねばならない、そして明るく、積極的で、謙虚に、調和的でなくてはいけない、などと、心によってさまざまな制約を設け続けていました。それらは確かにいずれもが創造主の意志の美しい部分だとは思いますが、私は最も恐るべきエゴの中にいたのでした。それは「何々をしなければならない」と思い続ける〝心のレベル〟での自制、そして意識を伴う意志だったのです。ですからそのため、心の働いている間にしかその自制も行われませんし、しかもその自制力も実に弱いものでした。それ以後、一時期、私は大きな混乱に陥りました。魂の自殺さえ、ふと思うことが何度もありました。結局それらは全て混乱が混乱を生み出す心のエゴ的作用だったのですがいずれにせよ、数日後に宇宙から強力な修正を加えられるまでは、毎日がただ精神的混乱に満ちていました。でも、その修正を加えられて、私は本当の宇宙的意識への自己放棄、真のリラックス、そしてそれによる分裂感の消滅を学ばせられたように感じられます。私は他人に愛情深く奉仕しなくてはと心のレベルで考え続けて、結局、最も重要な〝自らへの奉仕、言い替えれば自らの中の神への奉仕〟をしていなかったわけです。すなわち、直感的径路が「何々をしよう」という欲によって、完全に閉ざされていたのです。

本当の愛とは、自らの中の宇宙的な、すなわち基本的な、生命を成熟させることではないかと思っています。それが結果として万物に愛を与えることになるのではないかと感じられます。私達が自らの生命を成熟させるということは、宇宙それ自体の理想の成熟に他ならないと思います。そして我々がただ一つの神(宇宙の意識)に身をゆだねる時、かくもみごとな調和的愛が実現されるでしょう。その時にこそ私達は部分的に神の一部分のみを求めなくとも、創造的エネルギーが純粋な心に流れ込むことによって、調和的に愛し、親切で、積極的に、しかも謙虚で、全体という意識がごく自然に意識しなくても表現できるのではないかと思います。想念観察もそのための準備にこそ必要となってくるのだと思います。

勝手に意見など述べましたけれども、GAPの皆様にも私のような混乱に絶対に陥ってほしくないという気持からペンを取らせていただきました。これからも御指導をお願いいたします。彼らブラザーズの宇宙文明と私達の世界が一日も早くその精神的、文明的接触をすることを祈ってやみません。スペース・ブラザーズもきっと慎重にその計画を進めているに違いありませんね。

死人でなく、生きた人間に

山形県　山口　緑

十二月二十日付の御書簡を有難く拝見させて頂きました。御親切に深く感謝致しております。

参加させて頂きましたGAP総会は実に素晴らしく、息の詰まるような高尚さを感じた次第です。今年は初めて池田君と先生の御講演をお聞きすることが出来、彼と共に喜んでおります。

アダムスキーの他界直前の録音テープは、実に身にせまるものがあり更に初めて聞いた彼の声は意外にオクターブが高く、響きのあるものでした。

山形に帰宅後、十二月十七日に総会の模様をテープで流し、主にPRSのメンバーに紹介致しました。実に食糧問題といい、カタストロフィーの問題といい、ほとんどの人が実感として受け入れがたいらしく(私もそうなのですが)、しかし「何かが起こる!」という内部からのささやきを聞かざるを得ません。

私がGAP活動に参加させて頂いてから早くも三年になりますが、おかげ様でいろんなすばらしいメッセージを受け、学習させて頂いてきました。まだまだ未熟でと弱ですが、私のレベルからみて、予期以上のことを学ぶことができたことをうれしく思っております。おかげ様で小グループながらPRSなる研究グループも運営できましたし、私自身、最近自分でもおどろくほど雪葉が丁寧になったようで、それと共に謙虚さも養られたようで誠に嬉しく思っております。御指導をたまわった先生はじめ、大学の先生や友人に、そして全人類、いや全創造物に衷心より謝意を表するものです。

私もまだまだエゴの固まりですが早く「創造のパワー」を最大限に表現すべく、「死人」ではなく、まさしく「生きた人間」とならんべく努力し、学習せんと覚悟を一段と強めた次第です。さらに最近おろそかになっていた超能力開発をも本格的に訓練を行うべく考えております。

私は冬期休暇にはいり、一面「白」の世界で息で手をあたためながらすごしております。現在、小学生、中学生、高校生と、それぞれひとりずつ家庭教師として教えておりますがなかなかむずかしく、いや、大いなる学習として励んでおります。

先生は私が「眼鏡をかけている人だとばかり思っていましたが」と書いておられましたが、実際、先生とお話をした時もかけておりました。しかし一大決心をして、メガメを絶対はずしてやろう!と思い、燃えております。これができた時には、よし何でもやれるんだ! 不可能なことは何もない!という大いなる自信と信念で満たされることでしょう。

私もぜひ将来アメリカに行ってみたいと思っています。私もなぜかアメリカにひかれるところあって、大学の専修科目(教員の免許をとるためのもの)を選択した次第です。

(編者注=山口緑氏は山形大学生。GAPの傘下グループ「PRS」を組織し、機関誌「ユニバーサル・メッセージ」を発行。詳細は左記へ。山形県上山市小倉三〇、同氏宛)

超能力開発進む

東京　柳町和臣

こんにちは、久保田先生、いつもお世話になり、ありがとうございます。先生が去る二月の月例会の時は「超能力が芽ばえた人は、ぜひ私に知らせて下さい」とおっしゃってい

たので、僕は僕なりにやってきた経過を多少なりともお知らせしておきます。

七三年GAP入会当時はGAPの人達の想念波動を受けるように、大脳をできるだけ受け身の状態に保つように努めました。当時は人数が少なかったので、これは比較的楽にこの状態を月例会で維持することができました。受信して感じたことは、なんとなくGAPの人々からは春風のようなものが流れてくるのです。ちょうど僕が札幌にいた頃、残雪はまだあるけれど、その残雪の間をぬって吹いてくるしっとりとした暖かみのある風のように――。その頃の僕はそれだけで十分でした。

話は変わりますが、いつの間にか目覚まし時計が不必要になりました。夜休む前に腕時計を見て、あくる朝起きる時間をきめて大脳へ伝達するだけで、ほぼ同時刻に目をさますことが可能になりました。

さて本題にはいりますが、七六年五月十七日以来、亀田先生のお宅へ時々おうかがいするようになりましてから、現在では画相の幻視ができるようになりました（編者注＝画相の幻視とは、だれかの顔を見つめると、本人の関係者の顔が数名見えること。その見える位置その他によって、本人の運勢を予知することができる）

まだうっすらではありますが、とにかく見えます。従弟の顔などを見ると特によく見えるようです。これからいよいよ透視の練習へ進もうとしています。これもアダムスキー氏の言う「できるだけ高い意識を持つ人々と接しなさい」という言葉を実行した結果と信じています。

人間は各人が個性をもった一つの生命体です。現在、僕が存在する世界にも種々の人々がおりますが、その中でも特に先生やGAPの人達、亀田先生と接触する機会と時間を得たことに感謝しています。

予知能力が出てきた

静岡市　野口敏治

初めてお手紙出します。私は日本GAPに五十一年四月に入会し、五月から月例会に出席して一年になります。そこで一周年を迎えたので、入会する前の自分と現在の自分の変化を少しレポートしてみました。

私は写真製版の仕事をしていますが、神経を使う仕事で夜の九時頃までかかります。以前はよく肩がこり慢性の胃腸病で夏もハラマキをはなすことが出来ませんでしたが、入会後は肩こりはなくなり、胃もよくなってハラマキもとれ、カゼで寝込むこともまだありません。

入会後のある日、仕事をしていた時、取引先のイメージが強烈にわき起こりました。「これは一週間以内に注文が来るぞ」と感じました。そしてちょうど一週間目の土曜日に封書と小包で注文が来ました。そして日曜日にも小包で注文が来ました。以後このようなことが時々あります。また家の「ふすま障子」を張り替えてもらうことになり、こんどはどんな模様かなと思ったら想念通りオレンジ色主体の草花の「ふすま障子」でした。また五十一年十二月のGAP総会が終わった日、家でGAPニューズレターを読み返していた時、今度の六十号の表紙の色は何色かなと思ったら、想念は灰色がかった紫色でした。そして五十二年一月十一日に六十号が届いて、あけてびっくり、うすい紫色でした。

また五十二年二月十八日午後五時半ごろ、配達の帰り、夕焼空を見ながら車を運転していた時「この夕焼はいつもと少し違う。これは明日どこかで地震がありそうだ」という想念が起こりました。自分の心は「まさか」と疑いましたが、念のためメモしておきました。そしたら二十日の朝刊に、十九日午後一時ごろ大島と八丈島で震度三の地震があったと出ていました。そして三月四日の夕方も例の夕焼けで「明日地震がありそうだ」という内部からの印象がありました。そしたら日本時間五日午前四時三十分、ルーマニアでM七・二の大地震でした（これは偶然だろうと思います）。国内では五日午後四時三十三分、岐阜県中部で震度二の軽震がありました。そして七日午後六時十三分、北海道、東北で震度四の地震がありました。今後はもっとくわしく予知できるよう努力研究していきたいと思います。特に私の住んでいる静岡は地震に関心が高いので、これを今年の研究課題の第一番としてがんばります。

入会前にも内部からの印象がやはりあったと思いますが、心がエゴ等でいっぱいになっていて内部からの声に耳を傾けなかったのでしょう。これを内部からの印象に耳を傾けるように教えてくれたのがアダムスキー氏であり、先生であったのです。このようなすばらしい会に入会させていただき、誠にありがとうございました。今後とも世のため人のためGAPのため微力ながらお役に立つようがんばってゆきます。また先生に質問したい事が山ほどありますがこれを自分自身の内部の印象によって一つ一つ解決してゆきたいと思います。これは何年かかるかわかりませんが、少しずつ努力してゆきます。

夢で飛行機事故を予知

東京　佐藤崇子

今はもう桜の花は見られませんが四月二日の月例会の時、上野公園は花見客で一杯でした。公園口の改札を出たとたん、あまりの混雑に呆然と立ちつくしてしまったほどです。実は私、次の瞬間に起きた出来事を先生に聞いていただきたく思いペンをとりました。

そのとき私の目に、道路の向こう側の文化会館前にいる一人のブロンドの髪を持つ人がとびこんできたのです。黒髪の中にただ一人ブロンドとは目が刺激を受けたのでしょう。そして私の心は期待して三～四秒その人を注目したのです。私の視力はよいほうではありませんので、髪の長い人だということしか見えませんでしたが、その人は改札口の方向を見ていました。

そして私は帰りのキップを買ってもとの場所を見ましたが、もうその人はいません。あきらめて横断歩道をわたり、文化会館左側の入口にはいろうとしたのですけれど、どうしてもあの人のことが気になります。と、次の瞬間、「ああそうだ、あの人はロビーの所に貼ってあるポスターの前にいるんだわ」と思ったのです。この事を確かめるため、右側の入口へ向かい、そして入り、半信半疑であたりをみまわしました。果たして彼はポスターの前にいたのです。彼はいちばん右側に貼ってあるポスターの前にいたので、私は左端に立ち――人違いをして人の顔をジロジロ見るのは失礼だと思い――ポスターを見るふりをしていましたが、しばらくすると彼は私の後ろを通って出て行ってしまいました。ベージュのスーツを着た彼はごく普通の濃淡のあるブロンドの肩まである髪をストレートにカットしていました。すぐに彼の立っていた所に行き、音楽会のポスターを見ますと、曲名が小さく英文で書いてあるほかは日本文のものでした。そして私は外へ出ましたが、今度は本当に彼は雑踏の中に消えてしまったのです。そして私が言えることは、私の気になった人の居場所がわかったということだけです。

アダムスキーとめぐり会って一年以上になりますが、近頃は私の個人的な心の進路を決定した夢を見たり――これはまさに意識からの指令で神の語ったというところでしょうか。夢の中で「どうしてもっと早く帰ってこなかったのか」と見知らぬ、しかも私を愛して下さる人から、愛情をもって叱られました。また、三月にカナリヤ諸島でエアバスの事故がある前の夜、低空飛行しているエアバスが滑走路にたたきつけられ、爆発炎上するという鮮明な夢を見ました。これらは私のほんのささやかな進歩の現れのいくつかなのだと解しています。もっと個人的なことに関してはアダムスキー哲学が私を救っている点について、とても書ききれるものではありません。

UFOと宇宙 24

隔月刊　1977/JUNE　目次

口絵
▷驚異の円盤２機出現！……1
▷コルシカ島のＵＦＯ……2
▷アルゼンチンで撮られた
　アダムスキー型円盤――……3
▷京都市上空でＵＦＯの機動演習？……4
▷スイスを訪れた円盤――……6

イギリス南部の怪奇ＵＦＯ着陸事件
ウィンチェスターに出現した **UFOと不思議な人間** レスリー・ハリス……10

ＵＦＯの仕業か？
謎のニューヨークの大停電 荒井欣一……16

チューリッヒ現地報告第３報
驚くべきコンタクトの全貌 ウェンデル・スティーブンズ……24

ジミーとジョージア州のＵＦＯ騒動
カーター大統領はUFOを見た！ ハリー・ヘルムス……30

特集 戦後UFO30年史

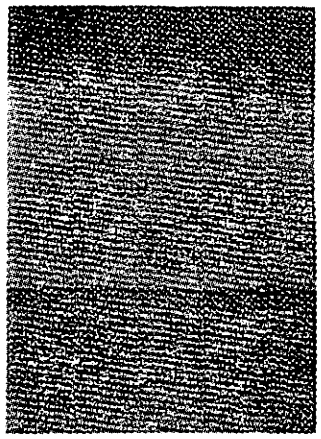
ケネス・アーノルド事件…36 ／悲劇のマンテル大尉事件… 38 ／ホワイトサンズ事件… 40 ／クラリオンの円盤と小人宇宙人… 42 ／ジョージ・アダムスキーのコンタクト… 44 ／コニストン円盤撮影事件… 48 ／火星人とのコンタクト… 50 ／バック・ネルソンの宇宙旅行… 52 ／南アフリカのＵＦＯ同乗事件… 54 ／ブラジルの奇怪な誘拐事件… 56 ／パプア島のＵＦＯ騒動… 58 ／バーニー・ヒル夫妻の不思議な体験… 60 ／ロドファー夫人の８ミリフィルム… 62 ／パスカグーラの恐怖の誘拐… 64 ／日本にもあった宇宙人コンタクト事件… 66

UFOに家族をさらわれた？ ルーディ・ベアードマン……22
火星には生命が存在する？ フレッド・ステックリング……70
(続) 宇宙・引力・空飛ぶ円盤(6) レナード・クランプ……91
天王星にも環があった！……34

UFO情報(海外・国内)……76　声・OPINIONS……102
科学ニュース……84　蚤の市……108

◎豪華景品が当たる読者アンケート大募集！……8

【表紙写真】
1965年４月18日、13:30にニューメキシコ州アルバカーキの西方10マイルでポール・ビラ氏が撮影。



〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル　株式会社ユニバース出版社　電話(832)1341(代表) 振替・東京1－119478
●書店にない場合はユニバース出版社営業部へ直接ご注文ください。(ご注文はすべて前金でお願いします)

各地例会出張報告

■岐阜・大阪の歓び

去る四月十六日、日本GAP岐阜支部主催の第一回岐阜例会と大阪例会に出席した編者は真剣な雰囲気に圧倒される思いであった。

この日午前中は東京の会社に出勤して普通に業務を行い、午後一時半の新幹線ひかり号で西下。三時半に名古屋着、岐阜支部長の松尾和也氏の出迎えを受けて喫茶店にて暫時二人で話し合い、夕方宿舎のワシントンホテルへ入り、大阪から来られた片氏、平塚氏と合流し、ホテル内の料亭で歓迎会が開催されたあと、同夜宿泊。睡眠中日本列島が沈没する鮮明な夢を見た。海岸に巨大な津波が押し寄せて、海中や陸地から火を噴く中を教員たる編者は生徒達をつれて避難するという光景である。

翌十七日、午前九時より商工会議所にて岐阜例会に出席。折から国鉄のストで多数の出席は危ぶまれたが、それでも約三十名の方々がお見えになり、熱心な空気に包まれながら、片氏のお話のあとGAPの過去の経過、「見られるものは自分である」のフィーリングによる超能力開発法、透視実例、イメージを描いて物事を実現させる方法等をお話しし、今夏のメキシコ行きがこの方法によりポカッと実現したことなど、あれこれと解説した。昼すぎ有志十名ばかりで昼食会が開かれたが、出席者の食事マナーは第一級であった。この例会で神戸の平塚氏が写真撮影を担当されたが、後日のご連絡によると、確かに巻いた筈のフィルムが巻かれておらず、空転現象となって写真が全然写っていないということで、残念だった。

午後一時半の新幹線で、片、平塚、松尾の三氏と共に岐阜羽島駅より西下。三時半より吹田市民会館で折から開催中のGAP大阪例会に途中から割り込むかたちで出席し、ここでも大体に岐阜と同じ内容の話をする。約四十名の出席者各位は真剣そのもの。参加者の後方に一時東京に在住された池田氏の絶えまない微笑があるのを発見して、うれしくなる。

夕方は会員筒井先生（弁護士）のヨーロッパ風の豪邸へ有志数名が招待を受けてスキヤキをご馳走になりながら和気あいあいたる雰囲気の中を四方山の話が出た。同席された木村夫人は予知夢を見る超能力者だそうで、やはり日本沈没の夢をしばしば見られるとの由。片氏のお話によると、大阪支部にはさまざまな超能力を持つ方が多いとのことで、会場で紹介された岩松真木子さんという美しいお嬢さんとそのご姉弟もそうだということだった。そのせいかどうか、編者は同夜宿泊した新阪急ホテルでもまた日本沈没の夢を見た。今度は島や陸地が一挙に沈むのを空中から望見する光景で、鮮明かつ壮大なものだった。日本沈没など夢想もしなかったのに、なぜ二夜も続けて夢を見たのだろう。翌日早朝の日航機で東京へ帰着し、丁度九時に会社へ出て、直ちに仕事についた。岐阜、大阪で多大なお世話になった松尾、平塚、片氏、筒井先生その他の方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

■青き新潟の海

四月三十日、午前中出勤したところ多忙のため予定の「とき八号」に乗りそこねて、次の「とき九号」で上野発。六時三十分に新潟着。支部長の尾立亘宏氏その他の方々の出迎えを受けて、駅付近の厚生年金会館へ入る。ここは会場と宿泊用ホテルを兼ねた建物で新築の立派な建築物だ。別室にて有志八名の方と夕食会が開かれ、この席で実に多数の質問が出た。同夜は会館内の五階に宿泊し、翌五月一日の例会開会は午後一時なので、午前中は市内をドライブすることになり、前夜の人々と二台の車に分乗して、一点の雲もない快晴の新潟市内を走り回る。こんな好天は珍しいとの由。ツイている感じがする。市内には格別見るべき場所もないということで、海岸へ行き、ここで全く久方ぶりに潮風に吹かれながら、しばし清純な日本海を眺めて大海原との一体化のフィーリングを起こす。やがて水道局の回転式展望台に上がり、ここから市中を一望する。

午後一時より会館の大広間で例会が開催され、編者は持参した米国GAP訪問のスライド約三百点を映写解説し、そのあと質疑応答に入り、五時に無事終了。続いて一階の食堂で夕食会を開催。有志七～八名と会食、懇談。この食堂の立派なこと、ヨーロッパへ持って行けばAクラスだろうと語る。会食者各位のテーブルマナーも見事。白人に堂々と伍せる方ばかりであった。

名残りを惜しみながら新潟駅より六時五十分の「とき十三号」で出発。発車間際に見送りに来られた数名の方々と握手を交わす。こんな時にはひどく感傷的になってヨワくなる。お世話下さった尾立支部長、平山徹、石川冨二男、星富治夫、今泉克美の各氏、その他の方々に厚く感謝する次第である。帰途は千葉県船橋市からわざわざ出席された浜村氏と楽しく一緒に帰京した。

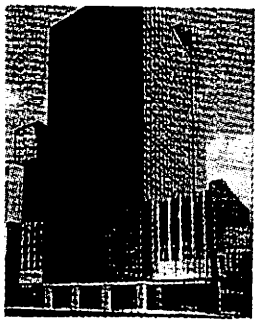
予告 昭和52年度 日本GAP総会 企画発表！

フレッド・ステックリング氏来日！

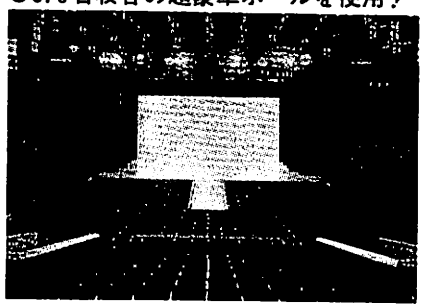
アダムスキー、ステックリング撮影ＵＦＯ映画を堂々３時間一挙上映！

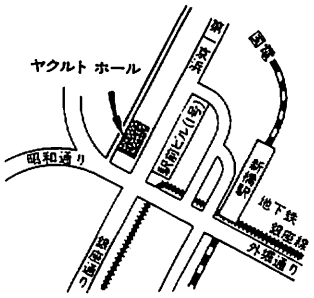
本年度の日本ＧＡＰ総会には、米国ＧＡＰ本部よりフレッド・ステックリング氏を招待し、講演とＵＦＯ実写映画公開による盛大な大会を実施することに決定しました。まだ半年先のことですが、会場確保とステックリング氏招待募金運動展開のため早目に発表した次第です。会員各位の絶大なご支援により盛会が実現するよう期待してやみません。

●主催　日本ＧＡＰ
●日時　昭和52年11月13日（日曜日）　午前10：00より午後4：30まで。
●会場　「ヤクルトホール」 港区東新橋1-1-19　ヤクルト本社ビル１Ｆ　Tel.574－7255／国電・地下鉄「新橋」駅下車徒歩３分。（銀座大通りを４丁目方面から歩いた場合は昭和通りとの交差点を直進してすぐ左側）
●当日会費　￥2,000



●570名収容の超豪華ホールを使用！





〈ご注意〉
●当日会費は会場入口でご納入ください。
●ホール内での喫煙、飲酒、食事はご遠慮ください（弁当持込みは不可）。
●昼食は休憩時に各自でホール外の場所ですませてください。再入場する場合は必ず胸にリボンをつけること。
●入場時に質問用紙を渡しますから、これに質問を記入して係員に返すこと。質問が多数ある場合は主催者側で選択して、「質疑応答」に提出します。
●テープレコーダー、カメラ持ち込み可。但し、ストロボ、フラッシュの使用は厳禁。録音内容や、映画の複写内容を他の刊行物に無断で掲載しないこと。
●控室へ不意に侵入したりホール外の場所でステックリング氏をつかまえて質問をあびせることはご遠慮ください。

プログラム

10:00→10:30　挨拶　久保田八郎
10:30→12:00　講演「アダムスキー氏の人柄と業績」　フレッド・ステックリング
―休憩―
1:00→4:00　ＵＦＯ実写映画公開（アダムスキー撮影のフィルムとステックリング撮影のフィルムを含む）
4:00→4:30　質疑応答　フレッド・ステックリング
4:30→4:35　挨拶　久保田八郎

司会　片　京／通訳　アン・デイカス

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京本部、大阪、高知、新潟、熊本、福知山の各支部で毎月「月例研究会」を開催して宇宙哲学の研鑽、UFO研究、情報交換、テレパシー練習等を行い、会員の精神的向上と親睦を図っています。近辺の方はぜひご参加下さい。出席者は会員に限ります。

東京例会

1、日時　毎月第二土曜日、午後二時より六時まで。
2、会場　上野公園内「東京文化会館」四階会議室。電話(828)2111。国電上野駅の「公園口」下車改札口の真向かい。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから四階へ行く。
3、会費　二〇〇円。
4、携行品　テキストとして「生命の科学(文久書林刊)」を持参。二時→三時＝「生命の科学」講義、三時→四時半＝代表挨拶・報告・テレパシー練習・休憩、四時半→六時＝自己紹介、研究発表、質疑応答。

★　★　★

大阪例会

1、日時　毎月第三日曜日、午後一時より五時まで。
2、会場　大阪府吹田市出口町四丁目、「吹田市民会館」電話(388)7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。
3、会費　一〇〇円。
4、携行品　テキストとして「宇宙哲学(たま出版刊)」「生命の科学(文久書林刊)」を持参。

★　★　★

高知例会

1、日時　毎月第一日曜日、午前十時より。
2、会場　高知市桟橋通り二―一―五五、「青年センター」電話(31)4931。
3、会費　一〇〇円。
4、携行品　テキストとして「生命の科学」

★　★　★

新潟例会

1、日時　毎月第四日曜日、午後一時より五時まで。
2、会場　新潟駅前、厚生年金会館四階会議室
電話(43)3551。
(右予約不可の場合、同駅前「青年の家」)
詳細は足立宛ご連絡下さい。
足立亘宏　新潟市五十嵐中島二九四三
電話(62)0968(夜間のみ)

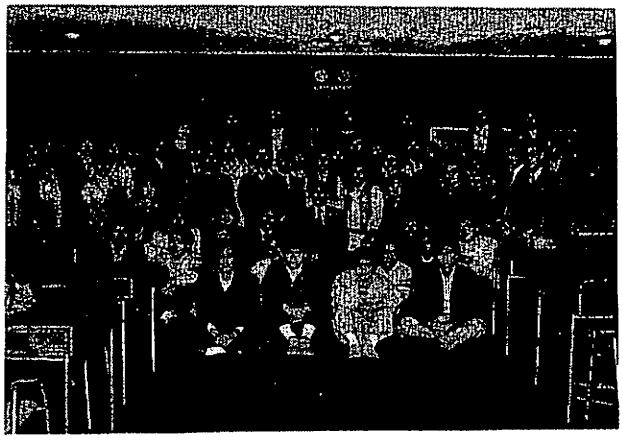
熊本例会

1、日時　毎月第三日曜日、午後二時より五時まで。
2、会場　熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。
電話(55)5235。国鉄熊本駅前から市電「健軍」行き乗車、「お城前」下車。同交叉点左折、徒歩二分。
3、会費　一〇〇円。ご注意＝六月の会場は二本木の常通寺
4、携行品　テキストとして「テレパシー(文久書林刊)」「生命の科学(同)」二時→三時、久保田代表の東京例会における「生命の科学講義(録音)」、三時→五時　自己紹介、座談、質疑応答。

福知山例会

1、日時　毎月第四日曜日、午後一時より五時まで。
2、会場　「福知山市民会館」二階会議室。駅前から右方向の道路を直進し、二つ目の信号機の所。
3、会費　五〇円。
4、携行品　テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」久保田代表の講演録音、テレパシー練習、自己紹介、研究発表、質疑応答。

●4月2日，東京文化会館での東京月例研究会



フレッド・ステックリング氏 招待募金運動開始！

右頁に発表のとおり、日本ＧＡＰの今年度総会には、米国ＧＡＰ本部よりフレッド・ステックリング氏を招待して、アダムスキーに関する講演と貴重なＵＦＯフィルムの公開による素晴らしい大会を開催します。会場は超豪華設備を誇る新築のヤクルトホール！この絶好の機会をお見逃しなく、ぜひ募金運動にご協力の上、大会にご参加ください。

●募金目標　　金額100万円（ステックリング氏の日本ランゲージルス→東京間往復航空運賃＋300,000円、東京滞在中の宿泊費、交通費、謝礼等一切を含む。目標額を達した場合、ウイングリード夫人も招待する予定。）

●申込額　　1口¥1,000（1人）1口以上　何口でも可）

●送金方法　　本紙に添付の募金用振替用紙に記入の上郵便局から振込み下さい。（申込書面は、ご連絡下さい。会場その他の案内と一緒にします。）

〈お願い〉
この募金運動に参加しなくても、当日会費により総会に入場はできますが、経理面で難渋やトラブルの発生しないことが望ましく、なるべくご協力の程を伏してお願いいたします《日本ＧＡＰ事務局》。

フレッド・ステックリング氏

ステックリング氏はドイツのベルリン生まれ。18歳のときカナダへ移住して航空機とＵＦＯに限りない関心をもち、ジョージ・アダムスキーに師事して研鑽を積むうちにスペース・ブラザーズとコンタクトするという稀にみる体験を持ったＵＦＯ研究界の第一人者です。特にアダムスキーの高弟として最後まで仕え、死の数日前に師が「生命の科学」に関して語った重要な言葉その他の貴重な情報は本誌第58号に詳述してあります。彼は1966年秋にヨーロッパへ講演旅行に行った際、故国ドイツの急行列車の窓から上空に出現したスペース・ブラザーズの大母船団を８㎜映画に撮影し、米国で公開して大センセーションをまき起こしました。このフィルムも持参する筈です。

編者久保田八郎は1975年秋に米ＧＡＰ本部を訪問し、アリス・ウェルズ夫人、フレッド・ステックリング夫妻、その他の方々と会見して多数の情報を与えられ、その詳細は本誌第58号に掲載しましたが、今度は日本で皆様方が直接彼に接して、アダムスキーに関する貴重なお話や驚異的ＵＦＯ実写映画をご覧になれますので、ぜひともご来場の上、すばらしい一日をおすごし下さい。なおステックリング氏の体験記は「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」と題して、文久書林（東京都文京区白山1-29-12。TEL. 813－2495）から出ています。ご一読の上、予備知識をお持ちになることをおすすめします。

■米ジョージ・アダムスキー財団より翻訳合本出版権獲得！

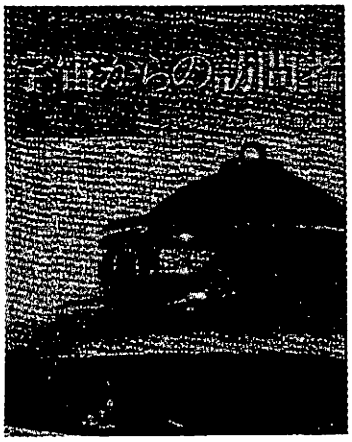
宇宙からの訪問者

＝偉大な惑星人との会見記＝

絶賛発売中！

定価1300円（〒160）

●空飛ぶ円盤は実在する！　遠い惑星から、偉大な進化をとげた人類が、大宇宙船を駆って地球の救援に飛来……壮大な宇宙空間の大スペクタクルと驚異的事実をつたえた本書は、まさに20世紀最大のドキュメントだ！



ジョージ・アダムスキー／著
久保田八郎／訳

●「空飛ぶ円盤実見記」「空飛ぶ円盤同乗記」として名高い二点の記録書をアダムスキー研究家として著名な久保田八郎が流麗平易な訳文により全面的に改訳、「実見記」のうちアダムスキーの手記と「同乗記」全文を合本として事件の理解を容易ならしめ、また未発表写真を含め50点以上の写真・図解を一挙掲載した決定版である！

ユニバース出版社
〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル
☎832-1341～44 振替 東京4-194478

●書店にない場合は直接小社までご注文ください。

第1回

中米宇宙考古学遺跡の旅

（ロサンゼルス市とパロマー天文台見学）

ユニバース出版社はＧＡＰ会員の方々に素晴らしいツアーを企画しました。ふるってご参加の上、古代メキシコの謎の遺跡群を久保田八郎と共にたっぷりご見学下さい。帰途はアメリカのパロマー・ガーデンズとパロマー天文台も見学します。

行こう！　古代の神々の戦車の国へ！

●期　間	8月12日→25日（2週間）
●人　員	30名
●費　用	￥497,000（ホテル代と朝食代その他一切の費用を含む。昼食と夕食は各自負担。24ヵ月分割払いも可）
●申込先	〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル ユニバース出版社ツアー係 （50円切手同封お申込みの方に説明書をお送りしますから、まずこれをお読み下さい）
●メ　切	7月25日（参加申込のメ切日です）
●コース	東京→ロサンゼルス→メキシコ市→オアハカ→ビリアエルモーサ→メリダ→カンクン→メキシコ市→ロサンゼルス→東京
●主　要見学地	メキシコ市、テオティワカンの太陽のピラミッドその他、モンテアルバン、ミトラ、パレンケ、ウシュマル、カバー、チチェンイツァの各遺跡、ロサンゼルス市、パロマー・ガーデンズ、パロマー天文台。
●同行者	ユニバース出版社社長・ＵＦＯ研究家 久保田八郎
●主　催	ユニバース出版社
共催	国際アカデミックセンター
●協　力	メキシコ政府観光審議会

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

￥750　〒160

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述

テレパシー■生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

￥450　〒160　　￥550　〒160

絶賛！アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

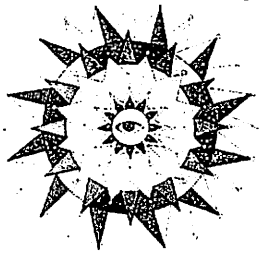
フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！　￥650　〒160

文久書林　東京都文京区白山1－29－12　振替・東京2521 Tel.(813)2495

①

②



①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒100 ②￥200〒50 一括注文の場合〒100

編集後記

★長くお待たせしましたが、ここにやっと第61号をお送りできて嬉しく思います。ご迷惑をかけて喜べる筋合いのものではありませんが、とにかく一安心しました。

★本号で「スペース・ブラザーズはなぜ来るのか」を終了の予定でしたが、頁数の都合で次号完結とします。

★ニューヨーク在住のGAPメンバー宮内温夫氏よりすばらしい原稿を頂きました。当方の要請に応じて書かれたもので、今年は日本各地で大々的に作品展を行われるとの由。詳細は次号あたりでお知らせしましょう。

★「サイレンス・グループの正体」はブック・オヴ・アダムスキーより転載したもので、卑劣な妨害者に対して真相を明かしたこの記事内容は興味深いものです。

★今年上半期は岐阜・大阪・新潟各支部の例会に出席して大変有意義な体験をもつことができ、お世話下さった方々に心から御礼を申し上げます。各地の質疑応答で、米国のあるグループに属している日本人青年が日本で出したある書物の内容について質問がありましたが、更めて申しますと、同書114～115頁の記事の一部は真赤なウソだとお答えしましょう。編者はこの部分だけを第三者から指摘されて目を通しただけで、他の部分は一切読んでおりません。

★他人が仕掛けたくだらぬ攻撃には巻き込まれないというのが編者の信条であり、そんな暇があればむしろ建設的・発展的方向に前進する方が利口ですから、その意味で今年の総会は米国GAP本部よりアダムスキーの高弟であったフレッド・ステックリング氏を招待して盛大な大会を催し、大いに宇宙的フィーリングを高揚させようということになりました。本号38～39頁をごらんの上、ふるってご協力・ご参加の程をお願いします。これにより低次元の想念を吹き飛ばそうではありませんか。

★右頁の広告どおり、今夏八月十二日より二週間、ユ社主催の「中米宇宙考古学遺跡めぐりの旅」を実施することになりました。これは時間の都合上、米GAP本部へ立ち寄ることは不可能と思いますが(都合によっては可能かも?)、パロマー天文台へ行く途中パロマー・ガーデンズには寄って、ア氏関係の"遺跡"を見学します。余裕のある方はふるってご参加下さい。ローンで二十四ヵ月払いの方法もあります。詳細はユ社宛五十円切手同封の上、案内書をお申し込み下さい。旅行の案内役は編者の他に共催国際アカデミックセンター企画室長田中氏、現地では優秀な日本人ガイド氏となっています。メキシコ市ではかつてのアダムスキーの高弟であったマリア・クリスティーナ・デ・ルエダ女史と単独会見し、ア氏関係の知られざる情報、秘話をたっぷりと入手、その他貴重な資料、スライド等を沢山持ち帰り、各地月例会で発表します。

★会員の皆様から多数のご質問状を頂きながら、四月から会社が猛烈に多忙になったために、さばききれず、たまっている郵便物の山を捌ぎながらすごしている日々です。弁解がましくて恐縮ですが、返事が遅れるのは全く物理的な事情によるものですから、ご了承下されば幸いです。しかし経理及び発送事務関係はすべて事務局の有能な助手が奉仕してくれますので大助かりです。その助手氏からのお願い。GAP関係のご連絡・ご照会は電話でなく必ず郵便で。郵便物にはすべて会員番号を書き添えて下さい。ご送金は一切郵便振替でお願いします。

(K)

GAPニューズレター　61号

編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

〒133　東京都江戸川区本一色町365！818

振替東京4－35912(久保田八郎名義)

May 30 1977　頒価300円・送料200円